

---

# 死神の薔薇

沖田リオ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神の薔薇

### 【Nコード】

N7904N

### 【作者名】

沖田リオ

### 【あらすじ】

地殻変動で地球上の大陸が全て地続きになった世界。全世界の統治権と特別な血を求め、守護者協会と革命家協会は血の滴る激闘を繰り返した。司はそんな時代に生まれた守護者協会の陰聖。圧倒的な刀裁きと、強力な呪術使いをする彼は対革命家協会の要として将来を期待されていた。だが、実際の司は超もののぐさで常に逃げ腰及び腰人間。しかも何かと理由をつけて教会を脱走するやっかいな人物。しかしその真の目的は『日本刀を操る闇』を探すこと。司は相棒の光希とともに世界を巡るたびに出る。

## はじめに

この小説を読むに際しての注意事項

- ・ 作者がまだまだ未熟なため、現実がかなり混在したファンタジーチックな微妙な世界観になっています
- ・ 多分ご都合主義になっていていると思います。ごめんなさい
- ・ 挿絵と表記されていますが、挿絵は一切ありません。設定画がちらちらと載っているだけです
- ・ そのうち画像が消えてURL表記になるかもしれません
- ・ 更新は超不定期です。たまに作者は蒸発して他のことに手を出します
- ・ 『薔薇』には花のバラ以外にも色んな意味が込められております
- ・ 作者はグロい描写はグロく、えげつない描写はえげつなく書くのが大好きです
- ・ ですがまだまだ文章構成能力が低いため、なんか凄いいことになっています
- ・ 以上の項目に嫌悪感を抱く方はブラウザをバックし、他の素敵な作家さんの小説を読むことをオススメします

ここまでお目通しください、『大丈夫。いけるいける』と言っていただける心の広いあなた、ありがとうございます。どうぞ先にお進みください。

## 【プロローグ】

西暦3XXX年。地殻変動で大陸が全て地続きになり、各国が統治権を求めて血の滴る激闘を繰り返した。

数多の戦争の結果。二ホンが勝利し、全世界を統治し、世界は平和になったかと思われた。

しかし、二ホンの裏で二大勢力【守護者協会】と【革命家協会】が、『True blood』という持つものは絶大な権力を手に入れられるという血と、全世界の統治権を争い始めた。その争いは表面化し、全世界の今まで人民が作り上げてきた文化を消滅させてしまった。

復興は進み、今までとはまったく違う文化を人間が営み始めたころ、ある恐ろしい呪術が両協会に伝わった。

チエス      チェイン  
【駒】と【首輪】

【駒】<sup>チエス</sup>の術にかけられたものは“<sup>シエルハ</sup>抜け殻”と呼ばれ、その名のとおり意思がなくなり、魂を抜かれてしまう。術をかけたものは“<sup>ワイデル</sup>支配者”と呼ばれ、自分が術をかけた<sup>シエルハ</sup>抜け殻を意のままに、駒のように操ることができる。

【首輪】<sup>チェイン</sup>の術にかけられたものは“<sup>シェーブ</sup>鎖付き”と呼ばれ、<sup>シエルハ</sup>抜け殻ほどの束縛はなく、意思はある。しかし、言論や行動が術をかけたもの<sup>ヴァーデレトス</sup>“飼い主”によって制限される。

この術に二大勢力は目をつけ、それを操り、お互いを<sup>せんめつ</sup>殲滅しようと協会の上層部の人間のみで継承していった。

もともと強い力を持つ人間のみでしか使うことができないこれらの呪術は、一般に出回ることなくそれぞれの手の内で温められてい

った。

しかし、何者かの手により、極秘とされていた呪術法が一般の人々に出回り、一部の強い力を持つ人間の手によって悪用され、街の裏にはシエルハとシェープが溢れかえった。

危機感を感じた守護者協会と革命家協会は、急遽対策本部を設立し、呪術の使い手を一人一人滅ぼしていくことにした。

なんとか悪用者の絶対数を減らし、一息ついた両協会は、対策本部として設立した部署を、別の目的で利用することにした。

対策本部は、それぞれの協会内で呪術を操ることができ、突飛した頭脳・戦闘能力・殺傷能力を持つ四人、『四天王』と呼ばれる四人を保有する、いわば精鋭部隊。これを利用して、相手の協会を殲滅させ、全世界を統治し、『True blood』を手に入れてしまおう。そうもくろんだ……。

35XX年。守護者協会センタービル最上階。

「えー。では、対革命家協会会議を始める」

口ひげを生やし、厳格そうな老人がしわがれた声で会議の開幕を告げた。

コの字型に並んだテーブルには、服装がばらばらな人間達が座っている。

ガーディアン レボリュショニスト

守護者と革命家の全面戦争で全ての文化が消滅した後、復興中に大陸の地続きが災いし、各国の文化が入り乱れた結果、服装が大きく変わってしまったのである。

様々な服の中から自分の好みのものを選ぶと自然、こうなる。

「今日は、『True blood』捕獲についてなのだが」  
「協会長」

書類を見ながらもごもごと口を動かす老人の言葉の途中で、一人の中年の男が拳手をした。

「なんだね」

口ひげを撫でながら老人が促すと、中年の男は非常にばつの悪そうな顔をする。

「一人……足りません」

すこぶる言いづらそうに、目を泳がせながら中年の男が言つと、会議室にため息の音が響いた。

老人もこめかみを節くれた指でおさえながらため息をついた。

「四天王か？」

「……そうでございます」

「アイツか？」

「……そうでございます」

中年の男が老人の質問に答えていくたびに、会議室には重い空気が流れていく。

沈黙が部屋を包む。

しばらくすると、騒がしい足音が扉の奥、通路から聞こえ、黒い服を身にまとった男達が数人、会議室になだれ込んできた。

「老帥！ 緊急事態発生です！ 重要書物庫がまた荒らされました！」

「またか！ セキュリティはどうなっているのだ！」

「あの男にかかれれば我々の最新のセキュリティなど、あつてないよ  
うなものです」

声を荒げる老人に、今度は中年男ではなく、インテリそうで厭味  
たらしい若い男が答えた。

会議はそこで中断し、会議室にいたメンバーは全員重要書物庫へ  
と向かった。

その部屋の入り口では、たくさんの黒服の男達がわらわらと、シ  
ョートし、黒い煙を上げている機器の前に群がっていた。

その様子を見、会議室で最後に発言した厭味たらしい男が、狂っ  
たように機器の周りにいる男達をおしのけ、まだ熱を放出している  
機器に抱きついた。

「ああ！ 私の最新技術を駆使して作り上げたミツコが！ ミツコ  
がこんなに傷ついて！」

この世の終わりだともいわんばかりの形相で、厭味たらしい男  
は機器の検分を始めた。

そして、愕然とした顔になった。

「そんな……ありえない……」

「何がありえないのかね。犀」

固まっている厭味たらしい男に老人が問いかけると、厭味たらし  
い男は「信じられない……信じられない……」と  
うわごとのように呟きながら答える。

「今回の……無理やり壊されたら、警報が鳴る仕組みだ  
ったんです。……でも、鳴らなかった……」

「つまり？　どういふことなのだ？」

「暗証番号は・・・私しか知らないはずなのに・・・あけら解除さ  
れた・・・」

「番号が外に漏れただけではないか？」

苛立ったように老人が言つと、「違ふんです！」と厭味たらしい  
男は反論した。

「暗証番号で解除されたのではありません！　あの男は、ミツコを  
あけられた  
全て解体し、また組み立て、そして時間差で警報が鳴るように仕組  
んでいったんです！」

男の言葉どおり、今、協会内ではけたたましいサイレンが鳴り響  
いている。厭味たらしい男は、今自分がやっているように手順通り  
解体すればミツコの警報は鳴らない。と続けた。

「じゃああれじゃないの？　設計図が渡っちゃったんじゃないの？

Death  
Rose  
あの男に」

「違う！　それは絶対無いんだ！　ミツコの設計図は私の頭の中に  
しか存在しない！　図面には表していないんだ！」

恥も外聞もはやないようで、厭味たらしい男は豊満な胸の女性  
の問いに答えたあと、機器に頬を擦り付けながら泣きはじめた。

泣くのも無理はないだろう。この厭味たらしい男は、『ミツコ』  
を開発するために寝食を削り、一年以上の歳月をかけてきたのだ。  
それをものの数分で解体され、しかも細工までされたとなれば、泣  
きたくもなるだろう。

厭味たらしい男が泣く姿を見つめながら、いまこの場所に集うも  
のは全員、改めて会議をすっぱかした“あの男”の凄さを実感して  
いた。



設計図も見ずに複雑に複雑を掛け合わせたような機器を手順通りに解体し、同じ順序で組み立て、更にはいたずらを仕掛けられるほど余裕を持った“あの男”の凄さを。

はつと我に返ったように、老人はきびすを返して重要書物庫の中に入っていく。

「盗られたものはなんだね？」

厳しい口調で老人が近くにいた黒服の男に問うと、

「旧文化人の書物、『世界遺産』と、『True blood』資料<sup>1</sup>です」

機械的な口調で答えが返った来た。その言葉に老人の眉根が吊りあがる。

「なぜ『True blood』の資料まで持っていかれたのだ！警備にナイトランクのシエル八を数十匹当たらせていたではないか！」

怒鳴ると、黒服の男はさも悲しそうな表情を浮かべた。

「そのシエル八達は……みな、殺されております」

一律に首を日本刀で刎ねられた死骸の処理はもう済ませたので現場を見ることは叶わなかったが、その惨劇はすさまじくえげつなかったという。

こめかみを不規則に痙攣させる老人のもとに、一枚の紙が手渡された。渡した者によると、この紙は抜け殻シエルハの死骸の上に置かれてい

た  
と  
い  
う。

つまり、あの男からの手紙。老人は力がこもりすぎ、白くなった指先でそれを開く。

文面には、

「会長。今回も意見を聞き入れてくれなかったので、自分の心はずたずたに切り裂かれました。慰謝料として2・3冊本借りていきます。そして傷を癒す旅に行つてまいります。多分帰りますので安心してください。Death Rose

追伸。犀の今回のセキュリティシステム、45点。園児が解くパズルレベル。ミツコっていう名前が気に入らない」

なんともふざけた文字が躍っていた。

ずたずたに引き裂かれたと言っているが。傷心旅行に行くと言っているが。紙につづられた文字のフォントからは、旅に出るのが楽しみで楽しみでしようがないと言っているとした受け取れなかった。文字が舞い躍っている。

読み終えた老人の身体中の血液が頭に集まり、爆発した。

「Death Rose!!!!!!」

その叫びは、協会の壁にひびが入るほど建物を震わせた。

心地よいまどろみの中、  
碧尉司は睡眠と覚醒の間をさまよって  
いた。

ちょうどいい温度で照りつける陽光が、とてつもなく気持ちいい。

めていく。

眠っちゃえ。

そう決意し、意識を手放そうとしたとき、自分の名前を呼ぶ声を聞いた。

「つかさ、さん」

まだきちんと舌がまわらないような発音は、とても耳慣れたものだ。だから安心して　無視した。

「つかさ、さん。司さん。つかささん」

たまにきちんとした発音をしながら、その声の主は司の身体を小さな手で揺さぶってくる。微弱な振動は、くすぐったいようできて、気持ちいいような気がする。

はつきりいえば、曖昧。あいまい

いつまで経っても起きない司に焦れたのか、「つかささん！ 司さん！」と怒気を含んだ声で小さい手は先ほどよりも強く揺さぶってきた。それでも睡眠にしがみつこうとする司は、起きない。

と、振動が止まった。これでやっと寝れると司が大きく息を吐き出すと、喉もとに手が伸びるのを感じた。

鎖骨の間にそーっと伸ばされる手を、司は頭の下に敷いていた右手で包み込んだ。

「目、覚めてるなら起きてください。司さん」

目を開けると、最初に飛び込んできたのはぷつと頬を膨らませた少年の姿だった。

「おはよう。光希<sup>ヒカリ</sup>」

「おはようじゃありません。もうお昼ですよ」

短く刈り上げた灰色の髪の間に入ると、同じ灰色の瞳の中  
にたっていた目くじらが収まった。こうやって頭を撫でくれるの  
が光希は好きらしい。

どうやら、光希は司が身に着けている銀の十字架のネックレスを  
触ろうとしたようだが、司はこれを他人に触られるのがあまり好き  
ではない。

ふああ、と大きなあくびをしながら司は起き上がり、目が隠れる  
ほど伸びた二ホン・ブラックと呼ばれる黒髪をかきあげた。

艶、色合い。柔らかさ。全てにおいて最高と賞される二ホン・ブ  
ラックの髪を持つ者は、守護者と革命家の争いの際に絶対数が減っ  
てしまい、今では希少な色として羨まれている。

うなじが少し覗く長い自分の髪を触りながら、司の藍色の瞳はま  
だうつろな夢の中にいる。

本人はポケットとしているだけだが、線が細く、多量の睫で縁取ら  
れた大きい目を持つ司のその表情は、憂いを帯びている。乱雑に伸  
ばしたつやのある黒髪の相まって、色惚けているとも見える。

実際、司が転がっている柔らかい草の生えた土手の下を歩く少女  
達は、みな振り返り司の容姿を再確認している。

万人が一度は振り返る恵まれた顔立ちをしているのに、自分の外  
見に頓着しない司はそれを利用しようと思ったことすらない。逆に  
コートや髪の手で隠れてしまい、真の魅力に気づくものはいないだ  
ろう。

まさに宝の持ち腐れ。

司は目の前に立っている、司のお下がりの魔道師を連想させる藍  
色の服を着た、まだ一桁の年齢だと思われる小さな体を近づけ、自

分の脚の間に座らせた。

痩身を背後から抱きしめると、光希から心地よい温度が伝わってくる。光希も司に寄りかかり、全体重を預けてくれている。

頼られていることに、愛しさと責任感が湧く。この子を絶対守らなきゃ、と。

しばらくそうしていると、ググウ・・・と光希のお腹がなった。

そういえば、朝にホットドックを食べさせただけでお菓子も何も与えていない。今はもうお昼だから、腹の虫も自己主張をしたのだろう。

悪いことをした。

「なんか食いたいもんあるか？」

そう顔を覗き込むと、光希の顔は真っ赤に染まっていた。盛大に空腹コールをしたことに羞恥を感じているのだろう。

こういうときの光希は、食べたいものなど絶対に答えない。自分だけお腹が空いていることが恥ずかしいようで、意地をはっているのだ。

年相応の反応が、可愛い。

今日、買い出しを済ませたらそのまま旅へ出発する。次にまわる予定の街まで小規模のバザールはあるだろうが、なんでも揃う大きなバザールはないだろう。

つまり、今日からしばらくは質素な食事で我慢しなければならなくなる。育ち盛りの光希にとってそれは司が感じる以上に辛いことだろう。

だったら、今日一日だけでもおいしいものをたらふく食べさせてあげたい。音を上げるまで食べさせてやりたい。

「・・・・・・・・フルーツサンドにするか」

眩くように聞かせると、光希の顔がパツと輝いた。けどすぐにそれを隠してしまう。

まだかわいらしく意地をはっている光希の右手をしっかりとつなぎ、司はバザールへと歩き出した。

## 【プロローグ】（後書き）

不定期更新ですが、これからよろしくお願いします。

## 【買い出し】

「水と、スティックパスタと、缶詰と……」

光希が司の手渡したメモを見て、必要なものをかごに入れている。この街、エリア・横浜は守護者協会の本部があるということで復興・発展が早く進み、屋内のバザール 過去の文献では「デリ」と呼ばれるものが毎日夜遅くまで営業している。

しかし、守護者協会が近代化、つまり街に電子機器・機械が普及するのを阻止しているため、冷房なんてものはもちろんなく、会計もレジではなく店員が全て頭で計算している。

また、交通の便も馬車はあるが電車はない。電気も自家発電。水道は江戸時代を見習って地下水路を網羅させ、100m間隔で配置されている井戸で自分で汲み上げる。

金が掛からず、ちょっとした運動にもなると一般市民には好評だが、めんどくさがりな司にとっては『めんどくさい』としか言いようがない。

しかも、守護者協会のビルは、先進国だった昔の二ホンの文献から当時最新の機械などを復元し、電気は自動水道も蛇口から、冷房暖房にエレベーター完備という超快適環境だったのだ。

そんな環境に今まで身を置き、さらに実家の倉から2000年から地殻変動前の世界について書かれていた本を読み漁り、『昔のほうが快適だ！』と無駄な知識を身につけた司にとって、何でもかんでも人力で行わなければならない生活は、二回目になるが『めんどくさい』

それならずと協会に住んでいればいいのだが、お堅い頭の老人達に囲まれてやりたくないことをさせられる生活よりは、多少手間



がかかってもしこうして光希と旅に出ているほうが良いと思った。

ちょこまかと商品棚の間を縫って移動する光希の後ろをついていくと、ある場所でぴたりと斜め下の小さい身体が止まった。その灰色の視線は一点に注がれている。

司も目を向けてみると、そこは『お菓子コーナー』だった。色とりどりの箱に入ったチョコレートや、小瓶に詰まった赤い飴玉など、様々なお菓子が棚いっぱいに並んでいる。

食べたいのか。

別に光希が今かごにお菓子を入れても構わないが、光希のことだ、そんなこと絶対しないだろう。リストに載っていないものを買うのが嫌だというのもあるが、光希自身が抱える過去から、自分が食べたいものをねだる、ということはしない。卑しいと思われるのが嫌なのだ。

（いや、恥ずかしいのか。それともねだり方を知らないのか）

それとも甘いものだけに甘えるのが嫌だとか。

欲しいのか？ と聞くといつもいらないと答えるが、甘いものが大好きな光希が欲しくないはずがない。それにこうやって変に我慢している姿を見ているほうが辛い。

ふい、と光希が身体の向きを変えた。「コン口とこしようにここでしたっけ」と不自然に声を出しながら歩いているところを見ると、自分の中から雑念を追い払っているのだろう。ぼくはお菓子なんていらないんだぞ、と。

いじらしいというよりは、かわいそうだ。自分の欲しいものを口にも出せないなんて。たまには年相応にどーんと甘えてもらいたい。

「司さん、これでいいですか？」

ちよいちよいとジャケットのすそを引っ張られ、かこの中身を確認した。予定のものが予定通りの量で入っている。

「なんか欲しいもんあるか？」

聞いてみると、光希はしばらく間をおいたあとふるふると首を横に振った。

「本当に？」

「・・・・・・・・いりません」

いりません、か。つまり何か欲しかったわけだ。

日本語では、欲しいものがない場合は『ありません』と普通答える。あるけどいらなときは『いりません』と答える。ただ単に言葉の間違っただけでも取れるが、きちんと日本語を勉強してきた光希が間違えるはずがない。

（ちっちゃいくせに強情だな）

とりあえず、これ以上何を言っても光希が口を割ることはないだろう。

と、ある考えが脳裏に浮かんだ。バッグから財布を取り出し、お札を3枚抜き、それを光希に渡す。

「これで足りるか？」

「えーと、500デールと750デールだから・・・足りません。一枚多いです」

「一枚つてどの一枚だ？」

司は器用にも財布から1000デイル札と5000デイル札と10000デイル札を抜いていた。

「1000デイル多いです」

「そうか。じゃあ光希にやる。お小遣いにしろ」

え、と顔をしかめ、いらないと言おうとする光希の口到人差し指を当て、3枚全部かごに入れた。どうせ一緒に旅をするのだから小遣いなど意味がないと光希は思っているのだろう。それでも司はおつりなどでこまめに与えることにしている。先立つものはいざというとき必要になるからだ。

あと、光希が好きなときに好きなものを買えるように。司のお金ではなく、自分のお金と認識していれば、好きなものが買いやすいだろう。

光希を一人でレジに行かせ、司はお菓子コーナーへと足を向けた。正直、司はお菓子が好きではない。甘い匂いをかぐと気持ちが悪くなってくる。でも光希は好きなのだ。この甘い匂いがする色とりどりの食べ物だ。

嗅覚と視覚と味覚。五感の半分以上を楽しませ、さらに子供をとりこにする。お菓子というのはかくも恐ろしいものだ。

高温でも溶けないチョコレート。多湿でもべたつかない飴。いつまでも湿気ないクッキー。味長持ちガム。ずつとひんやりフルーツジュース。旅に適したお菓子の箱を抱え、司はレジに向かった。

デリを出ると、光希が腕に荷物を抱えながら壁にもたれかかっていた。

「あ、司さん」

司の姿を認めた光希は、とてとてこちらに向かって走ってきた。一歩前に足が出るたび抱えられている紙袋から物が溢れそうで危なっかしい。

片手で紙袋を支えながら近くのベンチまで移動し、腰を下ろした。光希から紙袋を受け取り、協会から支給されたスリーウェイバッグにバランスよく詰める。

このバッグは素材にとっても優れていて、耐久性が高い。風雨にさらされても中に水が染みることはなく、どんなに荒い岩肌で擦られても1mmも磨り減らない。防刃・防弾も兼ね備え、強盗にあってもそう簡単に奪われてしまうことはない。

合金が使われているため重いのが玉に瑕だが、そのぶん安全だから良いとする。代価というものだ。

「光希」

「はい」

「やる。食え」

レジ前で買ったバナナアイスを光希に渡した。光希は素直にそれを受け取るが、パッケージを開けようとしない。嫌いな味だったのか？

「チョコがよかったか？」

光希は首を横に振った。しっかりアイスを握っているあたり、いいらないわけではなさそうだ。

「司さんの分は？」

そこか。

自分のことを置いて、他人のことを考えられるのはいい事だ。

「自分はもう食べた」

本当は食べていないが、ここで馬鹿正直に『食べていない』と答える大人はいないだろう。光希に変な気を使わせてしまっただけだ。

司の嘘を真に受けたようで、光希はパッケージを破り、幸せそうにアイスにかぶりついた。

その横顔を見ると、司の頬も綻んでくる。たまに甘えて欲しくて笑顔を見ると幸せな気持ちになって。自分に息子ができたらこんな感覚なのかもしれない。

全て食べ終えた光希からアイスのごみを受け取り、小さく丸めて目に付いたダストボックスに向かって投げた。きれいな放物線を描きながら、ゴミはダストボックスに入るかと思われた。がしかし、なんと絶妙なタイミングで飛んできた鳥に当たり、情けなくぽとりと地面に落ちた。

「……………幸先悪いな」

仕方なく落ちたゴミのもとへ行き、拾ってもう一度投げた。今度はきちんと入った。

またベンチへ戻り、光希にお菓子の入った紙袋を渡した。

「……………お菓子？」

中身を確認した光希は、驚いた顔を司に向けた。

何と言えばいいだろう。『好きなときに食べ』だと光希は食べよ

うとしないし、『光希のお菓子だ』と言っても同じ結果になるだろう。

そうだ。

「甘いものは頭にとてもいいんだ。ブドウ糖っていつてな、甘いお菓子里入ってるそれを食べないと、頭に栄養が行かないんだ」

まずは理由。

「二日に一回はどれか食べる。いくらでもいいからな。いいな？」

そして結論。頭ごなしに言うよりもこうやって理由付けをしたほうが聞き分けてもらいやすい。特に光希には良く効く。

光希は納得してくれたようで、「はい」と元気良く返事をした。司のバッグと同じ素材でできた光希のウェストポーチにそれらを詰め、腰に巻きつけた。支給されたウェストポーチは、子供の細い腰には少し大きい気もする。ファッションセンターを通ったら新しいの見繕うか。

この街でしなければならぬことは全て行<sup>おこな</sup>った。

あとは、出発するのみ。

街の出口で振り返り、もうしばらく拝めない横浜の景色を堪能した。やはり、愛着のある出身地から離れるとなると、感傷的な気持ちになる。

でも、行かなければならない。

それぞれの目的を達成しに。

「心残り、あるか？」

問いかけると、光希はウエストポーチからカメラを取り出し、パシャリとシャッターを切った。光希は司お手製のデジタルカメラで、別れを告げる街の写真を撮る。

イコール、心残りはない。

横浜を断ち切るように。これから始まる険しい旅と対峙するよう  
に。司と光希は力強く踏み出した。

## 【目的と装飾】

街から一步出ると、風景はがらりと変わる。

舗装されていないむき出しの土。見晴らしが良すぎる空。地平線上にぼつぼつと立つ街。街と街の間には何もない。

時折すれ違う人間は、司たちと同じ旅をする者だろう。それでなければ行商人か、飛脚か、エンジンニアか。

・・・・・それとも、シェルハ シェーフ 抜け殻か鎖付きか。

抜け殻も鎖付きも、マークを見ない限り見分けることが難しい。他人の所有物と成り果てても、外見は人間のままだからだ。

ただ、一ついえるのは、シェルハ 抜け殻には感情の色が全く見えないことだ。

風に煽られ、囁きだす木の葉を眺めながら歩く。

「それで、今日はどうやって抜け出してきたんですか？」

「ん？」

抜け出した、というのは協会を脱走してきた、ということだろう。光希からの問いに回らない頭で脱走ルートを思い出す。

今回も、さつさと革命家と和解しろ、と会長に言い、「忙しいから後だ」と欲しかった言葉が返ってきて、大喜びした。『心が傷ついた』と旅に出れる大義名分ができたからだ。

さつそく敬語をずらずらと並べた手紙を書き、ビルの最上階で会議がある時間に被せて重要書物庫へ向かった。その会議には司も出席しなければならなかったのだが、すっぱかした。

書物庫の鍵として使用されている、犀が「最高傑作だ！」と一年か二年かけて作ったセキュリティ機器を三十秒で解体し、中へ入っ



た。

前々から目をつけていた旧文化人 地殻変動前の人間が書いた書物『世界遺産』の本と、『True blood資料1』の本計二冊をがめた。後者の本は門外不出の代物で、ナイトランクの抜け殻が数十匹護衛に当たっていたが、司は『紅桜』で一気に抜け殻の首を刎ね、涼しい顔で本を手に入れた。

抜け殻の死骸の中で司はあることを考えた。先ほど書いた手紙を取り出し、追伸として犀が製作したセキュリティシステムの感想を添え、一番血を噴出して<sup>ふきだ</sup>いる抜け殻の肩にそつと乗せた。

部屋を出るとき、解体したセキュリティ機器に少し手を加えてから組み立て、てきとうに傷をつけ、煙をのばらせて退散した。

そう光希に伝えると、光希は丸い目を更に丸くし、呆れたとでも言いたげな顔になった。

「ナイトランクの抜け殻<sup>シエルハ</sup>って、そうとう強いんじゃないんですか？」  
「いや、そうでもないよ」

ナイトランクというのは、抜け殻<sup>シエルハ</sup>を力の強さで分類したうち、“ナイト”と分類、つまりランクされた抜け殻<sup>シエルハ</sup>のことである。

チェスの駒とほとんど同じく分類されており、一番下がポーンランク、一番上がキングランクとなっている。ごくたまに皇帝<sup>エンペラー</sup>ランクの抜け殻<sup>シエルハ</sup>が現れる。

ランクが上であれば上であるほどその抜け殻<sup>シエルハ</sup>は強いことになるが、そのぶん絶対数が少ない。

まあ、ランクが何であれ司には敵わないだろうが。

「仮にも自分は四天王だよ？　そう簡単に抜け殻<sup>シエルハ</sup>に喰われるはずもないって」

四天王。協会の中で高い知力・卓越した戦闘能力・突飛した殺傷能力、そして呪術を使える四人の総称だ。司はその中の一人で、この世で一番刀使いに長けていると言われている。

けたけたと笑い飛ばすと、「かりにも四天王が協会のぶつ<sup>物品</sup>ぴんは破損  
そんなで脱走なんかしませんよ」とかわいらしく怒られた。

でも、こうやって脱走しなければ光希と逢うことだってなかったのだ。

光希      飛鳥<sup>あすか</sup>光希は、司が前回の旅の途中で拾ってきた男の子である。

当時はぼろ布を一枚だけまとい、麻でできたけばだったラグに座り、物乞いをするという乞食同然の暮らしをしていた。

子供の物乞いは何度か見かけたが、光希にはなぜか目が留まり、少し話をしてみることにした。すると光希は、昔自分を捨てた親を探しているのだという。

そこで司は、一緒に旅をしないかと伝えた。世界各地をまわる司との旅なら、きっと両親とも再会できると説得し、仲間になった。

それから数ヶ月。光希はずいぶんともなになった。  
普通の洋服を着て、普通の食事を摂って、普通の言葉を学んで話して。生活と人間としての素質が普通の水準になった。

思えば、自分は光希の親を捜すのではなく、光希に普通の生活をさせたいがために、旅に誘ったのかも知れない。

まあもつとも、抜け殻<sup>シェル</sup>や革命家に常に狙われ、血を見ない週はないという司との生活も、普通とは言えないだろうが。

光希がごそごとウエストバッグから地図を取り出し、それを広げた。

「今度は、どこに行くんですか？」

広げられた地図を覗き込んでみるが、大陸が全てつながっている  
ので何がなんだか分らない。

そこで司は近くの大木の根元に腰を下ろし、自分が一番慣れている  
地図を取り出した。

世界がばらばらだったころの世界地図。こっちのほうがつつと理  
解しやすい。今の世界と過去の世界の地名は変わっていないので、  
旧国名を知ってさえいれば一発で場所を見つけることが出来るのだ。  
その点、地続きの新地図は旧国境が一切分からないので、見当を  
つけるにも時間がかかる。

慣れ、というものもあるだろう。光希は新世界地図のほうがい  
やすいようだ。

「わあ、むかしの世界地図だ。司さんってアナログなんですね」

「だな。新しい地図にはどうしても慣れん」

実際は昔のほうが科学が進んでいたわけだから、光希たちのほう  
が“アナログ”となるわけだが。

光希は物珍しそうに司の地図を眺めている。

「むかしって、みんな離れてたんだ。・・・あ、地名は一緒だ。思  
ったら司さんってむかしのものいっぱい持ってますよね。どこで手  
に入れたんですか？」

「実家の蔵」

「くら？」

「そ。蔵」

碧尉家はその昔、日本七名家の一つとして名を馳せた医者の家系  
だった。その遺産として莫大な土地と人脈と金と、旧文化人の軌跡  
が残った。

司は幼少期、毎日のように入り浸り片っ端から掘り返していった。そこである人物に出会った。

「翼じいちゃんが残してくれた、蔵」

今は亡きご先祖様、『碧尉翼』と出会った。

2000年代前半に生きていた翼はたいへんな秀才で、10歳の時には欧米の言語を全てマスターし、高校入学時には一つ論文を書くだけで億単位のお金が入ったそうだ。学校生活でも人望があり、常に周りに友達がいる容姿端麗・成績優秀な文武両道のご先祖様。司は翼をとて誇りに思っており、憧れの存在として尊敬している。

「これとこれも、翼じいちゃんのだぞ」

司は十字架のチャームがついたシルバーのネックレスと、愛用している日本刀を取り出し、光希に見せた。両方、翼が使っていたものだ。

「さわつてもいいですか？」

おずおずと問われ、頷く。

光希はまず、司の首に下がるネックレスに興味を示した。座った司のにもに乗り上げ、まじまじと眺める。

「クロスだ。ちょっと欠けてる」

「ラテン十字っていうんだ。欠けてるのは1000年以上も前のだからしょうがないだろう」

「1000年！？じゃ、こっちは！？」

次に光希は日本刀を指差した。さすがに刃物を触らせるわけには

いけないので、光希の身体を遠ざけてから鞘から刀を引き抜いた。

「・・・紅い」

光希の言つとおり、刀身が紅い。

名刀『紅桜』<sup>ベニザクラ</sup> 戦国の世から碧尉家に家宝として伝わる日本刀

紅桜』 刀身が長く、実際に幾人の首を刎ねたというこの刀は、妖しく紅い光を反射している。文献によると、打刀としては最高の刀で、それはそれは残酷なまでの切れ味を披露してくれたという。斬った人間から流れる血を掛ければ掛けるほど、その鋭さは増していったそうだ。

実際、これで<sup>シエルハ</sup>抜け殻や<sup>シェーフ</sup>鎖付きを斬れば斬るほど、滑らかに刃で肉を裂くことが出来るようになり、その切り口もあざやかになっていた。

「こっちは、何年物ですか？」

「戦国時代からだから・・・・・・2000年ものだな」

「2000年前の！？　なのにきれい！」

「きちんと手入れしてるからな。光希もきちんと手入れしてるか？」

「してますよ。見てください！」

光希は服の内側に手をいれ、一本の短剣を取り出し、司に渡した。短剣『ダガー』 護身用として使い方を教え、随時光希に携帯してもらっている。鞘から引き抜くと、まだ多く使っていないことを示すような光が溢れてきた。日本刀とは違い、刀身が短いため相手に致命傷を与えることは難しいが、その分サバイバルに向いている。

「ん。オッケー。どこに刺せばいいか言えるか？」

「目！ 首！ けいつい！ みぞおち！ 股間！ アキレス腱！」

「頸椎刺すとどうなるんだっけ？」

「運動神経の束が切れるので即死！」

「よし。完璧」

頭を撫でてやると光希は嬉しげな笑みを浮かべた。

いくら旅路が物騒でも、こんな暴力的な単語をまだあどけない児童が笑顔で言つてのけるのはいかなものか。

もっとも、教えたのは司だが。

「・・・で、行き先どこですか？」

はっと気づいたように光希が話を戻した。

司はすっかり忘れていた。

もう一度二つの地図を並べ、上から覗き込む。

「一つ前の旅の最後、憶えてるか？」

光希はきまり悪そうに首を横に振った。

「最後に自分気づいたんだ。“アイツ”の出現場所」

「“アイツ”って、『日本刀を操る闇』ですよ」

「ああ」

『日本刀を操る闇』それは司がずっと追いつけている謎の男。全身黒づくめで日本刀を操る男、それしか情報は持っていない。

いつも旅先に現れ、意味深な言葉と笑み、そして暴走した高ランクの抜け殻を一匹置いてどこかへ消えてしまう。

『日本刀を操る闇』自身の戦闘能力も存外高いはずだ。戦闘能力が高くなければ駒の術の使用、ましてクイーン以上の抜け殻を大量に従えさせることはできないからだ。

会ったら、聞きたいことがたくさんある。

「“アイツ”は、美しいものがある場所に出るんだ」

それも旧文化人の色が濃い美しい場所に。

「美しいもの？ 宝石とかですか？」

「それもあるが、祭りとか、歴史的建造物とか、その辺りによくでる」

「それで、僕たちの行き先は？」

せかすように司のコートの裾をひっぱる光希を見つめながら、司は口を開く。

「旧世界遺産だ」

「旧せかいいさん？」

オウム返しをするということは、旧世界遺産がよく分かっていないのだろう。光希の灰色の瞳いっぱい疑問符が浮かんでいる。

ここで教えてやってもいいが、それよりもしなければいけないことがある。

「後で教えてやるから、今はもう少し歩いて宿を探そう」

昼間は歩き、夜に休息・勉強。目的の街に着くまではこのペースを続けることにしている。いくらものぐさでもケジメは必要だからだ。

光希はなにか言いたげな顔になったが、しぶしぶ頷いた。きちんと聞き分けてくれる子供はこういうときともありがたい。

司は重い腰を上げ、ダガーを光希に返却した。地面と木につけていた部位の埃を払う。

近くの宿屋を地図で探しながら、光希と並んで歩いた。



## 【見逃せない徴】

「別に、こんな高い部屋に泊まらなくてもいいじゃないですか」

光希が不満げな声を上げたが、司は満足だった。

目に付いた宿のスイートルーム、ここが今日の寢床だ。光希はもっと質素な部屋がいいと言っていたが、睡眠くらい快適なものを求める司の意見を優先させた。

「だからって安い部屋に泊まらんでもよかろう？ ほらっ」

羽毛の枕を下から光希に向かって投げると、光希はそれを胸で受け止め、もふもふと遊び始めた。

こういうところは子供だな。無邪気な姿がすこぶるかわいい。司はベッドからシーツを持ち、そうっと光希の後ろに回りこむ。そして一気に被せた。

「わっ」

光希は小さく叫んだあと、きゃっきゃと笑い始めた。こうやってふざけても苦情が来ないのが、スイートルームの利点だ。

と、光希がかぶっていたシーツを取り去った。

「司さん。旧せかいいさん、教えてください」

「ん？ ああ」

さつき宿に着いたら教えると言った司を覚えているようで、光希が催促してきた。

司は壁にかけたバッグから旧世界遺産の本を数冊取り出し、光希

に分かりやすい二冊を選んだ。

「おいで」

ベッドにどっかり腰を下ろし、光希を脚の間に座らせ、本を開く。

「カラー写真だあ」

「きれいだろ？」

まず開いたのは、旧世界遺産の写真集だ。

「旧世界遺産って言って、旧文化人が近代化を進めるずっと前に生きていた人たちが造った、その時の歴史や文化を未来に伝える重要な建物を、“世界の宝”。つまり“世界遺産”と決めていったんだ」「造ってからすぐ世界遺産と決めていったんですか」

「いや、造ってからずーっと経ってから」

「ずーっと？」

「そ。ずーっと。気が遠くなるくらいずーっと」

光希は興味深そうにページをめくっている。今では珍しく、趣味の一つでもあるカラー写真と、建物の美しさに見入っているのだろう。

本当、昔の写真はきれいだ。ため息が出るくらい。

せわしなく動く小さな手が、あるページで止まった。

「きれい……」

「気に入った？」

聞くと、光希は大きく首を縦に振った。

そのページに掲載されている写真は、なんとこれから司が向かお

うとしていた遺産の写真だった。

「フランドルの鐘楼だ」

ベルギーはフランドル地方の鐘楼。そこが今回の目的地だ。どうしてそこなのかと聞かれたら、答えは一つ。勘だ。

「行ってみたいか？」

光希は答えない。けど行きたげな表情をしている。ここに行くのだということは、あえて伏せておいた。

「そっちの本は何ですか？」

小さい手がもう一つの本を指さした。

「ん、こっちは」

説明をする前に部屋の戸がノックされた。普段司たちを訪ねる人間はいない。訝しみながら返事をする戸が開き、一人の女性が入ってきた。

「失礼します」

にこやかな笑みを浮かべるその女性には見覚えがある。と思つたら階下のフロントにいた受付嬢だ。受付嬢が何の用だ。

「あのお、不躰なんですけど、守護者協会の四天王の方ですか？」

ファンなんだという受付嬢は、媚を売るような視線を向けてきた。四天王のファンなんて聞いたことない。

「いえ、違いますが」

「えっ、司さ・・・もがつ」

訂正しようとした光希の口を押さえ、まっすぐ受付嬢を見た。自分の身分を明かすと面倒なことになるので、こういう質問には違うと答えることにしている。

「え？ そうなんですか？ すみません、てっきりそうだとばかり  
……」

恥ずかしそうに顔を伏せながら受付嬢は舐めるように部屋の中を見た。そしてごく自然に、耳に髪を掛ける仕草をしながら部屋を出た。

しかし、司はそのマークを見逃さなかった。

繋がった鎖の徴。しるし鎖付きだ。シェーブ

人間は首輪チェインの術をかけられると、左の首筋に鎖の徴が現れる。ヒトからモノに成り下がった徴が。

（鎖付きシェーブが何の用だ）

守護者協会の四天王かと聞いてきたのだからそれを調べたかったのだろう。自発的にだとは考えにくいから飼ヴァテレストい主の命令によってかでは、飼ヴァテレストい主は誰だ。守護者ガーディアンと対立する革命家レボリューショニストの人間の可能性が高い。

調べてどうするつもりだ。司は眉をひそめる。

と、腕を叩かれる感覚があった。何事かと目を向けると、司によ

って口を塞がれた光希がもがいていた。

「あ、ごめん」

腕をはずすと光希は肩で大きく息をした。その背中をさすってやる。

「っ、かささ、ん。なんで、ウソついたんですか？」

ヒュウヒュウと掠れた息を吐き出しながら光希は懸命に言をつなげる。

「鎖付きシエーブに身分明かししたら何されるか分からないぞ」

「！？ 今の人鎖付きシエーブだったんですか！？」

「そ」

「鎖付きシエーブが守護者とかくたいてきに身元確認ってことは……」

察しのいい光希は気づいたようで、どうするの？ と困惑した視線を向けてきた。

革命家に襲われるかもしれない、そんな心配この子にはかけさせたくなくて、小さな頭に手を置いた。

心配するな、司がいる。そう言おうとした刹那、窓の外から甲高い女性の悲鳴が聞こえた。

「なに！？」

光希はすぐさま窓に飛びつき、声のするほうを見た。

「司さん！ 来てください！」

呼ばれ、重い腰を上げる。光希の後ろに立ち、窓の外を見た。

「何だあれ…」

刃物のようなものを持った男がそれを振り回しながら奇声を発している。

薬物中毒か？ 目を凝らして男の動きを追っていると、その額に見えてはいけないものが見えてしまった。

司は内心舌打ちをした。窓の鍵を確認した後カーテンを閉める。

「司さん、助けに」

「行かないよ」

正義感に燃える光希につこり笑みを向けた

「なぜですか！？ 司さんならけちらせますよ！」

「自分にその義務はないからね」

「でも、人が困ってる。ぼくのこと助けてくれた司さんなら」

「光希」

少々硬い声を出すと、光希は口をつぐむ。

「何でもかんでも首を突っ込むと後々面倒になるんだ。自分達は身分が特別だから特にね。下手に手を出して怪我でもしたらどうする？ 自分は光希をそんな目に遭わせたくない」

司は四天王ではあるが警察ではない。困っている人を助ける義務なんて一切ない。

ゆっくり言い聞かせると、光希はうつむいたまま黙りこくってしまった。効いたようだ。

外からのノイズで、誰かが男に切られたのだと知った。生々しい現場を想像したのだろう、青ざめた顔で腕にすがりつく光希の耳を塞ぎ、ベッドに横たえた。

なんだかんだ言っても恐怖は感じるものだ。どこにも行くなとばかりに光希は司の厚手のコートの裾を握り締める。光希は乞食時代に夜盗に襲われたことがあると聞いた。もしかしたらそれを思い出しているのかもしれない。

子供をなだめながら司は光希の胸元からダガーを引き抜く。その刃を鞘から少し覗かせ、枕元に置いた。

鋭敏になった聴覚に、階段を昇る音、戸を叩く音、「お客様」と控えめに呼ぶ声が聞こえた。

来たか。司は器用に着ていた厚手のコートを脱ぎ、机にたたんで置いておいた茶色の軽く薄い丈夫なコートを羽織る。後ろ手に紅桜シエルフを忍ばせ、戸を開けると、予想通り先ほど来た受付嬢シエルフが立っていた。

司はスイートルームの鍵をロックし、気づかれぬようドアノブを壊した。これで光希を襲いにこの部屋に入れるものはいなくなった。

「何かご用ですか？」

作り笑いを浮かべると、目の前の女はぎこちなく慌て始めた。まるで、即興の劇を命じられたように。

「お客様、あなたのお力を見込んで一つお願いがございます」  
「何でしょう」

「いま、この宿の外で暴れているシエルハ抜け殻を……暴走抜け殻シエルハを、止めていただきたいのです」

たまたま出てきた涙をこれみよがしに見せられても、何の感情も

湧かない。

ニホンブラックの髪をかきあげながら、「一つ聞いてもいいですか」とゆったりした声音で問う。

「君の飼<sup>ヴァテレストス</sup>い主は誰かな？」

びくりと女の肩が跳ね、エイリアンでも見るような視線を向けてきた。鎖<sup>シェーブ</sup>付きの目は濁っている。

「なんの…で、すか？」

「何のつて、見えてるよ、ほら……」

触れるか触れないか、鳥の羽のような仕草で女の首筋の徴に触れる。刹那、女はすごい勢いで触れられた部位に自身の手を当てた。だがなぜか、その頬は赤らんでいる。司の容貌を見据えたまま。間近から見上げたことで司の素顔に気づいたようだ。

しかし、口を割る気配はない。仕方なく司はこの宿に来るまでに読んだ翼の本通りに動いてみることにした。

先に断っておこう。果てしなく不本意だ。

前髪を軽く流し、より顔が見えるようにする。不本意ながら女の身体を片手で壁に囲い、唇を耳に近づけた。この距離なら確実に吐息がかかるだろう。

低すぎない重低音で、そうつと囁く。

「隠さなくなつていいんですよ？ 君は何も悪くないんだから」

翼の蔵書“一発で落とせる女の弄<sup>メス</sup>り方”、なんでこんな本旅に持ってきたのだろう。そう思いながら読破した。

「教えてくださいよ。いいでしょう？ 君を縛り付ける人間の名前



を言うだけなんですよ・・・？」

効いて……いる。司が元来持つ強大な力も作用しているようだ。こんな鎖付きシェーブをつくる飼ヴァレトスい主なんかよりずっと絶対的な力が。

(……あれ？)

そこまで考え、次に何をすればいいかド忘れした。

必死に思い出そうとするが、文字の欠片も浮かばない。とつさに司は首筋に浮かぶ鎖の徴に舌を這わせた。女は「や・・・」と抵抗ともとれる声を上げたが、身体は抵抗の動きを示さなかった。

……鎖付きシェーブの首つて、舐めても味も何もしないし楽しくない。確か今の司の行動を載せているページのすみに、翼のものと思われる字で『人の細菌パラダイスな皮膚に粘膜くつつけるなんて何とおぞましい』と書いてあった。

もう、色仕掛けなんかするもんか。自分の馬鹿みたいな行動に呆れながら「教えて」ともう一度囁くと、女の口から掠かすれた声が漏れた。

「イヴァ……ン、スケルフス……キー」

「イヴァン・スケルフスキー？」

ロシア地方系の名前だ。

「革命家？」

女は頷く。

司を革命家の四天王だと聞きに来たのも、場所を教えて暴走シエ抜け殻ルハと呼んだのも、イヴァンに命令されたからか？ 司の質問に女はただただ頷いた。

これで情報は揃った。舌先に残る不快さに眉をひそめながら司は鎖付きを見下ろす。

異様なまでに上気した身体をもてあます鎖付きに笑いかけてやると、何を勘違いしたのか、鎖付きは司の首に腕を回してきた。

次の瞬間。司は隠し持っていた日本刀を一気に女の身体に突き立てた。

あまりの速さに音もなく刃は肉にめり込む。下腹部から入った刀は心臓を貫通し、うなじから出た刃先が背後のベニヤ板の壁をも貫いている。

今にも飛び出しそうな眼球をした醜い顔を眺めながら、紅桜の柄を勢いよく手前に引いた。片刃がちょうど上を向いていたため、あばらを容易く割られた女の身体は、いとも簡単に二つに裂けた。

血が飛沫き、床に壁に天井に赤くきれいな絵画を残す。

未だ首にまとわりつく鎖付きの腕に刃先を突き刺し、指一つ触れることなく床に叩きつけた。

(・・・いつ見ても綺麗だな)

美しい弧をえがく斬り口、体内から露出する緋色の内臓。その全てから流れ出る、赤い赤い血液。

薔薇のようだ。醜さなんてどこかへ消えた。残るのは、咲き誇る一輪の薔薇。

綺麗だとは思うが、司は顔色一つ変えずそれらを冷眼視していた。死神のように感情を憶えず冷酷に人肉を切り裂き、薔薇の如く美しい花を咲かせる。これこそ司が『Death Rose』と形容されるゆえんだ。

(あと2本、咲かせに行こう)

それはそれはため息が出るくらい美麗な花を咲かせてみせようで

はないか。

一面に血を浴びたコートを翻し、肉の塊を踏みつけるとグチヨ…と生々しい水音がした。いつものものぐさの仮面が取り払われた司はそれに頓着せず、宿の出口へと歩を進めた。

（さあ、D e a t h   R o s e の宴の始まりだ）

司の顔に、やっと本物の笑みが浮かんだ。

口角を片方だけ引き上げる。

冷淡で、酷薄な、嗤いを。

## 【暴走シエルハ】

一面に広がる血で、数人が殺されたのだと知った。

もつとも、ちらほらと転がっているぴくりとも動かない肉の塊からも分かるのだが。

司は宿泊している宿の光希がいる部屋を見上げた。カーテンは開いていない。大人しく寝ていてくれれば一番いいのだが。

やじうまは一人もない。そのことに飽きたのか、当事者の抜け殻ルハは民家の壁にもたれ大いびきをかいている。司が近づいても気づかないほど。

司は寝ている抜け殻シエルハの額を見た。

（ポーンか）

雑魚中の雑魚じゃないか。

思えば、辺りに転がっている殺された人間は女子供ばかりだった。女の鎖付きにポーンシエーブランクの抜け殻シエルハ、これらの呪術をかけた人間は相当弱いとみた。

人間が駒チエスの術をかけられると、胸からその人間のランクの駒

実際のボードゲームで使用される駒　　が出現し、額に胸から

出てきた駒の徴　　ナイトの駒が胸から出てきたら、ナイトの駒の徴　　が現れる。

ぐっすり寝ている無防備な今、息の根を止めたほうが楽だ。普段の司ならそう言うだろうが今の司は違う。

対象とする生き物が興奮していればしているほど、綺麗な花が咲くのだ。

起こすために紅桜で空を切り、風圧で抜け殻シエルハの周りにヒビを入れてみた。その大きな音に気づき、抜け殻シエルハが目覚ます。

と、抜け殻シエルハは握っていた包丁を司めがけて振り下ろしてきた。が、

司はそれをあつさりかわした。

的が外れたことに舌打ちをする抜け殻シエルハの目には、下卑た色が浮か  
び、油のようにギラついている。

「やあつとみつけたあ……」

くだらだたとよだれをたらすその口から発せられる言葉は、とても  
人間だった生き物のものとは思えない。

この世で一番零落れた生き物、抜け殻シエルハ。その中でも危険なのが『  
暴走抜け殻シエルハ』と呼ばれる生き物だ。

暴走抜け殻シエルハの作り方はいたって簡単だ。まず抜け殻シエルハを作り、支配  
者が死ぬか、抜け殻シエルハに支配者の血を飲ませるだけ。

すると抜け殻シエルハはただの暴徒と化し、本能の赴くまま殺害を繰り返  
す。基本無差別だが、過去に大量の同胞を狩った恨みから守護者・  
革命家両協会の四天王を目の敵にしているモノが多い。

はつきり言つて理不尽だ。抜け殻シエルハの命に手をかけたのはかれこれ  
300年以上も前の四天王であつて今の四天王ではない。狩らなけ  
れば一般市民が危ないという正当な理由まできちんと付いている。  
生き物の命を多数奪つた過去の責任を放棄するわけではないが、罵  
倒されるならまだしも、命を狙われるのは実に理不尽だ。

まあ、でもそうなつてしまったのを今更悔やんでも仕方がない。  
今は綺麗な花を咲かせることだけに集中しよう。司は抜け殻シエルハの目を  
見た。

年齢は30代前半あたり、韓国・中国地方系の顔立ちをしている。  
守護者協会にあつた資料によると、鎖付き・抜け殻シエルハは中国・韓国地  
方出身の人間が多いらしい。数百年前に中国と朝鮮半島は合併した  
ので人口がすこぶる多くなつたのと、ロシア地方に接しているため  
捕まりやすいのだ。

……ああ、だから抜け殻シエルハは過去の出来事をずるずる根に持つ輩が  
多いのか。司は得心がいった。

とりあえず、さつさと興奮を高めてもらおう。逃げながら少しずつ攻撃を加え、興奮が最高潮に達したときに斬ろう。

動いてもらうため身体の力を抜き、わざと隙をつくってやると知恵の浅い抜け殻はここぞとばかりに包丁を突き出してきた。それを左に流し、抜け殻に問いかける。

「君の支配者は誰？」

抜け殻は答えない。ただ不気味に嗤うだけだ。

「君の支配者はどこにいる？」

やはり抜け殻は答えない。舌打ちしなくなった。だから抜け殻は面倒くさい。

鎖付きはまだ意思をとどめているため、自分の身に危険が迫ったりしたら飼い主の命令を無視して口を割ることがあるのだが、抜け殻は意思も心も全て支配者に掌握されているため、拷問を加えても甘い言葉を掛けても絶対に口を割らない。紐をつけて支配者の元に戻るところと追跡してつきとめるくらいしか身元を割る方法がないのだ。

少し整理しよう。まずあの女の鎖付きの飼い主とこの抜け殻の支配者は同一人物なのか？

その確率は50%。飼い主と支配者は別々の人物で、共謀したとも考えられる。仮にそうだったとしても飼い主の名前はもう分かっているから、支配者の名前が分からなくても『イヴァン』という男から引き出せばいいだろう。

どっちにしても、元凶と顔を合わせることが可能。そう結論した刹那、眉間に包丁の先が迫っていた。

とっさに飛び退いたが運悪く死体の上に着地してしまい、ズル…と身体が傾く。紅桜の刃先を地面に衝いてバランスをとったがそ

のせいで右手が無防備になってしまい、

「っ！？」

袖からはみ出た手首を横に一直線に切られた。

血が、流れる。それを見た瞬間、世界がスローモーション化した。

流れる、流れる、紅い、紅い、自分の血。

サラサラしてて、温かい、司の血。

シンクノ、キレイナ、オレノチ。

モット、ミセロ。

次の瞬間、司は<sup>シエルハ</sup>抜け殻に飛びかかり、包丁の刃の部分を素手で鷲掴み、皮膚が裂けるのも構わず取り上げた。

顔にかかる、自分の血液。

もっと欲しい。

モットホシイ。

包丁の柄の部分を<sup>シエルハ</sup>抜け殻の右目に突き立てた。<sup>シエルハ</sup>抜け殻は悲鳴を上げたが、司はそれよりも刃の上を横滑りしたことで更に深く裂けた手のひらから流れる紅い液体を見ていた。

その目に浮かぶのは、恍惚とした、狂気。

司の血が<sup>シエルハ</sup>包丁を伝い、<sup>シエルハ</sup>抜け殻の目から溢れる血と混ざる。それが許せなかった。

「穢らわしい！！」

左ひざで<sup>シエルハ</sup>抜け殻のあごを思い切り蹴り上げると、いとも簡単にその身体は宙を舞った。

司の左手に残った包丁の柄の先には、つぶれた眼球が残っている。

触り、更に潰してみるとブジュ……と生々しい音を立てて黄色い液体が手を汚した。その液体も司の血と交わろうとしたため頭に血が上る。

俗物と自分の血が混合するのは、昔から許せなかった。

神聖なものを、汚物で穢された気分になるのだ。大事な花壇を害虫に食い荒らされたような。

起き上がり、性懲りもなく牙をむく<sup>シエルハ</sup>抜け殻の体力は残り少ないように、ふらつきながら向かってくる。

もう、十分だろう。司は紅桜を正面に構える。

適度な距離まで近づいてきた<sup>シエルハ</sup>抜け殻の首の付け根に狙いを定め、慣れた手つきで振り下ろす。

刃は驚くことに、右の肩口から左足の先まで綺麗に入れることができた。合同な肉の塊りが血をほとばしらせながら左右に分かれる痛みから生理的に来る断末魔を聞きたくなくて、<sup>シエルハ</sup>抜け殻の喉元に包丁をプレゼントした。

<sup>シエルハ</sup>地に打ちつけられた<sup>シエルハ</sup>抜け殻の死骸は、もう一寸も動かなかった。最後に一輪、綺麗な薔薇を咲かせて、その身を散らしていった。

(……どうすんの、コレ)

朝何も知らない一般人がこの血の海を見たら、気絶者続出間違いなしだ。

「!？」

反射的に翼は腰に差していた短刀を斜め後ろの家と家の間に投げた。

「ヒィッ」



投げた先にいた人物は、目と鼻の先に飛んできた刃物に怯え、その場で固まった。

転げるように逃げる影を司は感じ、逃がしてたまるかと短刀を投げたのだ。すぐその影の元に駆け寄る。

「く……来るなあああ！」

独特のイントネーションは、二ホン生まれの人間のものではない。鼻が高く、目が青く、肌が白いこの人間は……

「君、“イヴァン”？」

「なっ、何で知ってる!？」

やっぱりそうか。大元の元凶である、イヴァンだ。

イヴァンは司の威圧感に圧され、がたがたと小刻みに震えている。

「ねえ、君があシエルハの男の抜け殻シエルハ作ったの？」

「おっ、俺じゃない! 俺じゃないんだ! だから助けてくれ!」

「じゃあ誰が作ったの？」

「俺じゃない! 俺じゃないんだああああ!!」

埒が明かない。

「ええと、じゃあ君はあシェーフの女の鎖付きシェーフを作ったの？」

「ちがつ……ああ、そうだ。女シエルハの奴隷は作っバラヴィテルたんだ」

「うん、じゃあ抜け殻シエルハの支配者は誰？」

「俺じゃない!」

いや、もうそれは分かってるって。相当パニックになっている。落ち着かせるため、仕方なく司はあるモノを使うことにした。

しばし目を閉じ、精神を統一する。心の士気を高め、険をはらんだ視線をイヴァンに向けた。

それだけ、たったそれだけなのにイヴァンの身体は如実に変化を示した。

気をつけの体勢のまま、顔だけを引きつらせている。とても逃げたそうだが、身体が言うことを利かないらしい。

おかしい。普通の人間なら、四天王特有である万人を従えさせる覇気を出しただけでここまで縮こまるはずがない。そのオーラの束縛は強烈なものだが、一般人なら覇気を受けても、恐怖は感じるが逃げることはできる。

「君、もしかして」

一つの可能性が浮かぶ。それを確かめるためにイヴァンの左の首筋を見ると、予想通り鎖の徴があった。

だからか。他人の所有物に成り果てた元人間は、四天王の覇気にすこぶる弱い。強い者には逆らえないという動物的本能が強く働くためだ。

つまり、女の飼主<sup>ヴァテレスト</sup>はイヴァンなのだが、そのイヴァン自身も鎖<sup>シ</sup>付きで、飼主<sup>ヴァテレスト</sup>がいて……

頭が痛くなってきた。何を考えているのかもちょっと分からなくなってきた。

グルグルとループする思考と戦っていると、イヴァンの様子がおかしくなっていることに気づいた。

「グ、ググウウウ……」

意味不明な唸り声を上げたかと思うと、突然頭を打ち振りはじめた。

「ガツガガア……グガアアアアア！」

狂ったように雄たけびを上げ、隣の家を叩き始めた。その行動の意味を理解する間もなく、イヴァンは隠し持っていたであろう包丁で、自分自身を傷つけ始めた。

刺しては抜き、抜いては刺し。目の前で行われる自傷行為の果て、イヴァンの身体はくずおれた。一連の行為は、自発的ではなく、誰かに操られ、嫌々やっているように見えた。

その口が細かい声で、

「絶様……お許しください……」

とつむぐのを司は聞き逃さなかった。

絶、聞き覚えがありすぎるその名前に司は目を見開く。

まさか、またやったのか。

「あーあ、つまんねーの。もっとアソビたかったのになあー」

「うげっ」

声のする斜め上を見た司は顔をしかめた。

視線の先には、黒い服を身に付け、月光に金髪をなびかせながら2 m超の大鎌を抱えた毒々しいほど紅い、血の色の瞳をした男が一人、煙突に座っていた。

「久しぶりに逢えたのに『うげっ』はナイだろーつかさあー」

実に楽しそうに男はうそぶく。

しかし、彼の姿を見たことで一気に素面にかえった司は、逃げてくて逃げたくてたまらなかった。

いや、逃げる。

くるりと背を向け走りだそうとすると、ナニカが風を切り、司めがけて飛んでくる気配がした。

紅桜を頭上に掲げると、キンと響いてナニカが弾かれ、司の足元に落ちた。

絶が携帯している小ぶりの鎌だ。

「逃げるとかどんだけ小っさくなっただよあ、つかさあー」  
「絶！」

名前を呼ぶと、絶は「はあーい」とふざけた返事をした。

「ねえ、アソボーよ。つかさあ」

「遊ぶ？」

「ウン。アソボーよ。夜は長いんだからさ」

ギャハ、と絶は笑った。

ふてぶてしいほどの綺麗な顔には、血が数滴、付いていた。

【暴走シエル八】（後書き）

## 【Kill Devil】

「ねえ、アソボーよ」

言い終わると同時に絶は屋根から猫のように一回転して飛び降りた。

その腕に抱えられている鎌と絶の頬には、真新しい血痕が付いていた。

「誰か殺したのか」

「ん？ ああコレ？」

絶は頬と鎌の血を交互に拭った。

「なに、『Kill Devil』に恥じないオシゴトしてきただけじゃん」

「何が仕事なんだ」

「人殺し」

歌うように、彼は続ける。

「あ。オレのプレゼントどうだったー？」

「プレゼント？」

「けっこー楽しんでくれたよージャン。目ん玉ツブしてさ」

「目ん玉って……、ああ、あの抜け殻シェルハって君のだったのか」

「ピーンポーン。ってかリアクションうつすっいーっもつと驚けーっ」

絶は不満そうに口を尖らせる。驚くなんてそんな体力使うことし

たくなかった。

「四天王が暴走シエルハ作ってどーすんだよ」

「アハア？ 抜け殻狩り<sup>シエルハ</sup>は昔の四天王じゃん？ オレは関係ナッシングー」

まさか絶が司と同じ考えを持っているなんて思わなかった。協会  
は違えど四天王の考えることは一緒なのだろうか。

京極絶。守護者協会と対立する革命家協会の四天王だ。  
更に言えば、一方的に天敵にされている。

「にしてもさあ、キレイなハナ咲かせたジャン」  
「何のことだ」

わざととぼけると、全部見てたと絶は言つてのけた。

「さっすが『Death Rose』？ でもさ、でもさあ  
アレだけじゃ、物足りなくない？」

意味深に絶は大鎌を回す。

「見てたらさあ、ウズウズしてきちゃった」  
「欲求不満なのか」

「そーかも。だからその身体で発散させてくれないかなあ」

ペロリと長い舌を出す絶は、言葉遊びをして楽しんでいる。  
司で発散させてほしい。イコール、戦ってほしいのだ。  
この、血に飢えた悪魔は。

「アソんでよ。“夜は長い”んだからさ」

嬉々としている絶とは対照的に、司は終始逃亡の機会を図っていた。

「つかさあ！　つかさあああ！　どこ行つたあああーっ！」

自分を探す声を聞きながら路地のレンガにへばりつき、司は息を潜めていた。

ただいま逃走中。現実から逃走中。

何故逃げているのかと聞かれたら、単純に絶と戦うのが面倒だからだ。

べつだん、絶が強いからとか、絶が怖いからとかではない。力は四天王同士五分五分だし、あんなヒヨヒヨのヒヨコ相手に怖いものもない。

ただ単に、殺りあいたくないだけだ。

遠くで、バキッ……バゴッ……とモノを壊す大きな音が聞こえる。絶が司の名を呼びながら、手当たりしだいモノを破壊しているのだ。

壊れた物品の請求書は革命家協会に送つてもらふよう明日町役場に出向くことにしよう。過去に絶の暴れたあとの責任が守護者協会に回ってきたことがあり、「なんちゅー暴れ方したんじゃあー！！」と協会長にこっぴどく叱られた。目撃者がそばにいた司と絶を見間違えたゆえの事故だった。

濡れ衣の処理をし終えた直後の協会長に「ああ、そういえば」とそのことを伝えると、

『なぜそれを先に言わんのだあーっ！！』



と残り少ない体毛を逆立てながら怒られた。それが二つ前の家出の原因でもある。

『革命家の四天王と乳繰り合って！ 責任押し付けられおって！ お前それでも守護者のはしくれか！！』

とも言われた。

乳繰り合うとはつまり、性行為をするということだ。

男同士で性行為なんて100%ムリなのにそんなこと言うものだから、てっきり協会長は男色家なのだと勘違いした司は真顔で、

『ごめんなさい。自分、女性しか恋愛対象として見れません』

そう言ってビルの最上階から飛び降りた。

直後、バコオンと爆発音が聞こえたかと思うと、大量のナイフがと雨のように降り注いできた。

協会長の逆鱗に触れたと知ったのは、それから約半年後だった。

さて、今は回想に浸っている場合ではない。ここを安全かつ迅速に逃げ出し、光希の元へ戻るのが先決だ。絶の足音に耳を済ませながら影の濃い場所を選び、音を立てぬよう慎重に移動した。無意識に拳に力を入れる。

ピリツと、左手に刺激が走った。

開いて確認すると、先ほど抜け殻シェルハの包丁で裂いた手のひらに爪を立ててしまっていた。立てた爪の形をした傷から、ツウ……と血がこぼれた。

(まずい)

もう素面に戻ったので、血を見て躍り狂うことはないが、今この状況で血を流すのは非常にまずい。

青ざめた頭で拭うか舐めるか迷い、舐めてしまおうと傷を口元に寄せたが　もう、遅かった。

ガツと背後から伸びてきた手に手首をつかまれた。

「見いーつけたっ」

かくれんぼの鬼が隠れた子を見つけたようなノリで絶が笑った。すぐさま絶と向かい合うように身を返し手首を取り戻そうとしたが、ギリリ……と逆にもっと強く締め上げられてしまった。

「いつ……!」

骨が砕けそうほどの圧迫に、司は顔を歪ませるしかなかった。

「ん・んー。やっぱケガしてるー。血イ出てるー」

司の手のひらを見ながら、絶は鼻から大きく息を吸った。

「あー……、やっぱマジでいい二オイ……。うまそおー……」

恍惚とした表情で絶は手を眺める。

手首を戒められたことで行き場をなくした血液が体内を逆流し、唯一の出口である傷口から溢れ始める。それを見た絶は何を思ったのか、鎌の先でその傷を、拡げようとした。

「何する気だっ!」

「あっ! 動くなっつーの!! 大人しくしてろ!」

イラついたように絶は吐き捨てると、グイツと小型の鎌を司の喉元に突きつけた。手加減するつもりはないらしく、刃が喉仏に喰い込んだ。

「ちよつとでも動いたら切れるからなあ。まーあ、オレはそれでもいいんだけど」

満足そうに絶は笑い、傷を拡げる行為を再開した。

「ッ」

刺された刃は何のためらいもなく、包丁の跡をたどる。張りはじめた薄い膜が破れ、そこから新たな血があふれると、絶はまた鼻をならす。

「あー……、ホンツトたまんねーな……この香り」

「ッそんなに、匂うのか？ 鉄の匂いしか、しないけど」

しゃべったことで喉が上下し、鎌がさらに喰い込んだ。

「そりゃあもちろん。すげえ甘い香りする。だから司のこと見つけられたんだろ？」

常識を語るような絶に司は奥歯がきしむほど歯噛みした。

「つかさあー、司ってさあー、『True blood』じゃねーの？」

手首を拘束する力の加減を調節し、えんえんと血を絞り取りながら絶が問うてきた。とめどなく滴る血で司の手は水びたしになり、

自らの手首はおろか、絶の長い指までも穢してしまっていた。

「もし、そうだったら、…自分はどうの昔に、協会に、捕まってる……だろ」

「だよな。だよなあ……。でもさ、コレはあ反則だよなあ……」

いったい何が反則なのか。一人ごちた絶はふいに司の手のひらに顔を伏せた。そして舌を伸ばし、血溜まりを舐め始めた。

「何をっ！……ッ」

言葉が途切れたのは鎌が喰い込んだのと同時に、絶の爪が立てられたからだ。

絶はキスするように刃の痕を辿りながら啜ったかと思うと、傷口に舌を差し入れザリと舐る。あげくに歯を突き立てた。

「うあッ！グッ……！」

肉を、抉られる。剥き出しの神経を刺激されたことで、鋭い痛みが全身を駆け巡る。司は顔を上向け、表情筋を強張らせながら喘ぐほかなかった。首を流れる液体の感触で、喉が切れたのだと知った。せめて手を閉じれば……と思ったが、痛みで感覚が狂ってしまったようだ。しびれて　もう、動かせない。

数分間血を吸われ続け、やっと満足したのか、ジュルツと最後に音を立てて血を啜った絶は目線を司に向ける。

紅い瞳はその濃さを増しており、濡れ光っていた。

「あまあ……たまんねえ……」

うつとりと絶は血まみれの唇を長く赤い舌で舐める。

開いた口から零れる犬歯は異様に長く、どこよりも血に染まっていた。

「そうそう、その顔……ホントそそられるよなあ……」

あごを掴まれ、強引に目を合わせられた。

「もっと、欲しいなあ……」

彼の視線が司の首へと移動し、意味ありげに細められる。

その意図を察した司はさすがに焦った。

絶は、司の首を掻き切ろうとしているのだ。

手のひらならまだしも、首から直に吸われたらひとたまりもない。  
『Kill Devil』とへつらわれている絶は、人肉を無遠慮に裂いたり、引き千切ったり、血を噴水のように噴き上げさせることを平然とやってのけ、果てにターゲットを殺すことも厭わない、まさに悪魔のような男だ。

そんなやつに噛み付かれでもしたら、容赦なく全て吸い取られる。  
殺されてしまう。  
それだけは嫌だ。

光希が、待っているから。

……そうだ。

「ッ……ぜっっ」

司は余裕のない声で男の名を呼んだ。すると、「お？」と絶は楽しそうに意識を全て司の顔に向けた。

引っかかったな。

その瞬間を狙い、司は脚を彼のみぞおちめがけて振り上げた。

「グッ……！」

油断しきっていた絶はつぶれた空き缶のように身体を二つ折りにし、隣家の壁にしたたかにその身を打ちつけた。

間を空けず司は転げた絶にのしかかり、血を垂れ流す左手で喉を絞めた。

「ガッ……離せっ！　つかさあ！」

絶は司めがけて拳を繰り出すが、真顔でその腕を封じ込めた。

頸動脈を圧迫された絶の脳に血液が行かなくなる。じたばたと足掻いていた絶の抵抗はじょじょに小さくなり、荒い息を吐きながら瞳を霞<sup>かす</sup>ませるだけになった。

やがて絶は目を閉じ、ピクリとも動かなくなった。

脈はあるので死んだわけではない。脳の酸素が欠乏して、気絶したのだ。

気絶した顔も、絶はきれいだった。

喉にかけていた手を離すと、ヌチャ……と水音を立てて血が糸を引く。

もともと血液はサラサラな方なので粘り気は少ないのだが、一筋だけ切れずにいつまでも糸を引くものがあつた。

どれだけ遠くにいても、腐れ縁で繋がっている。まるで司と絶のようだ。手を振り強引にそれを切った。

「……やっぱり絶はヒヨコだな」

脚が自由なのを忘れていた。仕掛けた罠にあっさはまる。絶は

本当にヒヨヒヨのヒヨコである。

「さてと」

司はダストボックスをあさり、まだ新しく手ごろなマットを発掘した。それで絶を簀巻きにし、『粗大ごみ』と同じく発掘したペンで書く。

そしてダストボックスの脇に簀巻き男を投げた。

このあとコレがどうなるうが、司の知ったことではない。

懐中時計を見ると、針は午前2時を回っていた。夜明けまであと6時間以上もある。

この世界は夜が長い。

緯度や季節に関係なく、日没から夜明けまでの時間がすこぶる長いのだ。

煌々と輝く月光に照らされた殺戮の残骸を、感情のない瞳で、いつまでも眺めていた。

【Kill Devil】(後書き)



## 【十字架のキズアト】

部屋に戻ってまず最初に、光希の安否を確認したかった。

司は従業員が全員逃げた宿に戻り、手すりに血痕を残しながら急いで階段を上がっていく。

登った先にあった黒ずむ人の形をした肉塊をかまわず踏みつけ、ドアノブのないドアをもどかしそうにこじ開けた。

開けた瞬間、眩しさに目を細めた。部屋の明かりは点けっぱなしだったのだ。

（光希は・・・・・・・・っ！）

ぐるりと部屋を見渡し、不審者がいないことを確認してから光希のベッドに近寄る。

枕元に置いたはずのダガーが、見当たらない。

代わりとでも言うように、今司が手を付いている辺り、光希の腹部から胸元にかけてのシャツが、赤く染まっているような気がした。まさか。

「光希っ！ー！」

大量の冷や汗を流しながらシートをめくる。

そこには、胸に鞘が付いたままのダガーを包むように丸まっている光希が、目を閉じて横たわっていた。

顔の血の気がスウツと引いていく。

背中を汗が伝い落ちていく。

……まさか、司が目を離れた隙に、光希は

「つくしっ」

いきなりのくしゃみに司は身体を跳ねさせ、慌ててシーツを光希に掛けなおした。

まじまじとシーツにくるまれた小さな身体を見ていると、時折寝返りを打つようにもそりと動いた。

(……生きてる)

詰めていた息を全て吐き出す。

よかった。本当によかった。

光希の身になにかあったらと思うと、気が気ではなくなる。ふらふらと光希が寝ていないベッドに腰掛け、もう一度大きく息を吐き出した。

じつとりとした汗でシャツが肌に張り付く。

気持ち悪い。シャワーを浴びたい。

(風呂、沸いてるかな)

司は下げていた頭を上げた。

タオルやバスローブ等のアメニティは備え付けのものを使うとして、スリーウェイバッグから着替えと消毒液、包帯を取り出す。そして少し考え、消毒液と包帯はベッドの上に放置することにした。

幾度か光希を振り返りながら、浴室に向かい、バスタブに湯を張った。

まずコートを脱ぎ、砂埃を払う。やたらながいインナーのベルトを外す。

ネックレスは、絶対に外さない。

シャワーブースに入り、勢いの良い湯を全身に打ちつけると、熱さでピリツとした刺激が走る。汗ばんだ頭も濡らすために下を向くと、湯と混じり、色の薄くなった血液が渦巻きながら排水溝へ流れ

ていくのが見えた。

「……はあ」

無意識にため息をついた。シャワーを止めて鏡を見る。

「うわぁ……」

首には絶が残っていた鎌の傷がすっかり残っている。薄く膜が張っており、痕になることはなさそうだが、治るのに時間が掛かりそうだ。

手のひらの傷は、よく見たら十字の形になっていた。親指の付け根から横に走るものは自分でつけたものだが、中指の付け根から手首にかけて走るものは絶につけられたものだ。こちらのほうが完治に時間が掛かるだろう。

頬やあごにこびりつく、酸素と結合して黒ずんだ血痕をすべて流し、改めて鏡を見る。

そこに写るのは、まぎれもない司。

額や首筋に張り付く乱雑とした髪を除けば、髪色、大きく切れ長の目、無駄に長くバサバサの睫、すっと通った鼻筋、細く鋭い輪郭、なめしたような肌、割れた腹筋、どれも先祖である翼にそっくりだ。司がまだ小さいころから、翼を知る親類縁者から「翼の再来だ」と幾度となく言われてきた。翼の没後2500年間に生まれた碧尉の人間の中で、司が一番翼に似ているのだ。実際、翼が写る写真を見ると、顔立ちも体格も何もかも瓜二つだった。

そのことが、とても誇らしかった。

湯の張った浴槽につかり、天井を仰ぎ見る。

視線はそのままにして、左手をかざす。

指先から、付け根から、そして傷跡から、湯が顔に滴り落ちる。

舌を伸ばしてその一滴を受け止めた。

間近で傷跡を見る。右手でネックレスをつまみ、十字架のチャームを、傷跡の十字に沿うように埋め込んだ。

ヌブ……と身体はいとも簡単に異物を飲み込み、血を吐き出した。何の変哲も無い赤い血。この血が、問題なのだ。

司の血には特別なナニカが宿っているらしく、味も香りも他を圧倒するほど『イイ』らしい。

だから少しでも体外に出すと、その馨しい香りに惹かれてと絶は言っている。      どんなに身を隠しても、先ほどのように見つかってしまう。

司は埋め込んだ十字架を引き抜き、血をまとったそれを舌を伸ばしてしゃぶった。

舐めても嗅いでも司には自分の血と他人の血の違いは分からない。しかし、特別なナニカ存在はこの身を持って実証している。

薔薇を咲かせる途中に、敵からの攻撃で自身の血が流れるのを見ると、発狂する。

今更のようにじくじくとうずき出す手のひらの感覚に気付かないふりをする。湯の中にそれを沈めると、神経に水が染みてヒリヒリした。

鼻の下まで湯の中にいれ、ぶくぶくと息を泡状にして吐き出す。

軽くのぼせるまで入り、ザバアと派手な音を立ててあがった。

お湯は、血も混じってしまったので全部捨てることにした。光希が朝入りたいと言い出したら、新しく張ればいい。

自前の着替えの上にバスローブを引っかけ、濡れた髪を軽く乾かしてからベッドに座る。光希を見ると、ぐっすり眠っていた。

司は投げてあった包帯を掴み、適度な長さに伸ばしてちぎる。脱脂綿と消毒液で拭った十字の傷の上に軟膏を塗りつけ、包帯で覆う。

手を握り、伸ばし、動きが妨げられないことを確認した。

また包帯を、先ほどよりも長めに取り、手と同じく軟膏を塗った首に巻き付ける。クリップで固定すると、首に黒い革のチョーカーを巻いた男のことを思い出す。

絶はいつも革のチョーカーを巻いているが、夏場に蒸れてかぶれることはないのだろうか、無駄な心配をする。

そして、彼の言葉を思い出す。

司つてさあー、『True Blood』じゃねーの？

『True Blood』、それは絶対的な権力を手に入れられるという最高の血。巨万の富と名声をもたらすという至高の血。傷口に塗ればたちまち傷は塞がり、病人に飲ませれば病が完治し、枯れ地にまけば植物が芽吹き、穢れた物を浄化するという摩訶不思議な血。

最上級のの甘みと快楽をもたらす、極上の血。

文献でしかその存在は記されていないが、世界にたった一人だけ、その血を保有するものがいるという。

その血を手に入れば世界を完全に征服することができるので、守護者・革命家両協会が喉から手が出るほど欲しがっている。

そしてその保有者を捕まえるために、司や絶ら四天王がいるのだ。自分の血が『True Blood』かどうか、答えはすぐに出る。

否だ。

仮にそうだとしたら、定期的に行われる血液検査でまず引っかかる。司の血が滴った暴走シエルハの目が回復する。その他にも文献中の『True Blood』の特徴に当てはまらないなど、様々な理由から司は『True Blood』ではないと断言できる。しかし今まで一度も勘違いされたことは無いのに、なぜ絶に勘違いされたのか、知りたいと思うが、司は考えようとは思わない。

突き詰めてみたら、知らなくても生きていけそうなのでいいや、と結論された。

(……そうだ)

柔らかいマットに横たわりたい欲求を抑え、司はバッグから携帯電話を取り出す。

一般の人は存在すら知らない機器、携帯電話は、協会の上層部の人間や、有力者などの一部の人間しか持っていない。

司は協会からリード代わりに渡され、電源は切るなどしつつこくうるさく指導された。しかし司はそんなことをまじめに守る人間ではない。勝手に解体してその造りを調べ、勝手に改造・複製した。番号も変更し、協会からの電話は一切繋がらないようにした。

初期と比べ薄く軽くなった携帯電話のキーをプッシュし、ある人物に電話をかける。

電波が届くのにやけに時間が掛かる。今度もう一度改良を加えようと思う。

『……もしもし』

「もしもし、司です。こんばんは」

『……つかさあ？　なんだよこんな時間に。非常識だぞ』

「自分の辞書に常識の二文字は入っていないことくらい、真田さんならご存知でしょう？」

『……わーってるよ。わーってるっつーの。でもちったあ俺の用事も考えろよ』

電話の向こうで真田が酒臭そうな息を吐く。どうやら飲み途中だったらしい。

『んにしてもこのケイタイっつーやつは、うるさくてかなわんな。』

ちつちええクセにでつけえ音出しやがつて。……で、何の用だ」

「掃除、お願いしたくて電話しました」

「掃除？　つつーかまた盛大にやったのかよ。もうすこし落ち着けや」

「仕方ないですよ。自分も絶もお盛んな年頃なので」

お盛ん。いろんな意味に取れる。

「わーった。掃除な掃除。ったく、明日はゆっくり麻雀でもしようと思つてたのによー。ドタキャンしなきゃいけねえじゃねえか。大人の楽しみを奪うな」

「じゃあ、楽しみ奪つたぶん給料奮発しますよ。ただし請求書は守護者協会に送ってもらいますが」

「お前はいつもそーじゃねえか。そろそろ俺ブラックリストに載りそうでこえーんだよ。……んじゃ、きちんと結界張つとけよ。じゃあな」

ブツリと、通話が途切れた。真田の言葉でやらなきゃいけないことを思い出した。

（結界、張るの忘れてた）

司は窓から外を眺める。

暗くてぼんやりとしか分らないが、ところどころ血の池ができていたり、転がる死体が見えた。

それら全てが入るように、指で円を描く。

「バ・エーラ」

唱えると、ポウツと一瞬だけ淡い光が円に沿って出現し、消える。

これで結界を張る作業は終わり。

司は部屋の電気を消し、光希のベッドにもぐりこむ。

正面からダガーを取り上げ、抱きしめた。子供の体温は高いので、司はすぐに温まることができた。

「もう、ここを出て行くんですか？」

光希の問いかけに、司は濡れた光希の髪を乾かしてやりながら頷いた。

今朝、光希の体が寝汗でじっとり湿っていたので、本人の意思はお構い無しに風呂に入ってもらった。

「まだ朝早いですよ？ 9時ですよ？ 夜明けですよ？ まだお店も汽車も動いていませんよ？」

「だから行くんだよ。人目につかないうちに自分らはここを出なきゃいけないからね」

「なんかやらかしたんですか？」

やらかしたというか、掃除しなければいけないから。

「掃除を早めに終わらせないと、町の人が困るからね」

結界は許可した人間以外、その内に入れてくれないため、早めに解かないと町の人々の生活に支障をきたすのだ。

光希は乾いた頭を軽く振り、身支度をはじめた。

「まだ準備しないでいいよ。掃除が終わったら迎えに来るから」

「……またばくはお留守番ですか？」



不満そうに光希は抗議するが、児童に血みどろの凄惨な現場を見せられるわけがない。トラウマにでもなったら後々困るのは光希自身なのだ。

「そ。お留守番と言うか、荷物の見張り番だよ。自分の荷物もなくならないように見ててほしいな」

「荷物を全部外に持って行って、そこで見張りをしてはダメですか？」

食い下がる光希に、どう納得させようか司は首をひねる。

「外に荷物を持って地面に置くと、大事な荷物が汚れちゃうんだ。だから部屋の中で待っててほしいな」

「じゃあ、ぼくが地面に付かないように両方抱えます！ これで汚れなくて済みます！」

あまりにも力強く説得力のある言葉に「じゃあそうしようか」と頷きかけてしまったが、なんとかとどめた。

光希の思考回路に感嘆したが、司も負けてはいない。

「そっか。じゃあこのバッグ持ってごらん」

司はスリーウェイバッグを無造作に光希に向かって投げた。

光希はそれを胸で受け止め、後ろにコロんと倒れた。なんとかバッグを持って起き上がろうと、こめかみに青筋を走らせながら踏ん張るが、

「お……おもい」

諦めた。

司のバッグは諸々込みで5キロほどある。まだまだ未発達な身体  
の光希には重いだらう。理解させ、諦めてもらうために持たせてみ  
た。

バッグを片手で持ち上げ、光希の目を見る。

「持てる？」

「……持てません」

光希は目をきよろきよろさせ、唇を少し噛んだ。司は光希を立た  
せ、窓を指す。

「窓から見るだけならいいから、それで我慢してほしいな」

光希はタタタ、と窓に走っていった。身を乗り出し、覗き込んで  
いる。

「司さん。お掃除やさん、来てますよ」

「ほんとに？」

司も窓によると、タバコをくゆらせ、だるそうに髪をかきあげる  
中年の男性が見えた。

本当に来ていた。司は窓を開放し、サッシに足をかける。

「じゃ、光希、なんかあったら自分のこと呼ぶんだよ。あと廊下  
は出ないように」

「分かりました。……って、え？ 司さんまさかそこから飛び降り

っわー！！」

言葉の途中で、司は宙に身を投げ出した。ヒュウツと風を切る。

何回か回転し、衝撃を和らげるためにひざを曲げて着地した。

誰かが着地した司に近寄る気配がする。その足取りはボテッとしており、非常にめんどくさそうだ。

「ちつちええ子供一人残して窓から飛び降りるとか、バカかお前は」

紫煙を吐き出しながら男がだるそうに呆れた言葉を吐くのを、司は笑みで受け止めた。

「朝早くごくろうさまです。謙信さん」

「昨日は名前で呼んで、今日は名字で呼んで、ちったあ統一しろや」

「めんどくさいので丁重にお断りします」

「大人の言うことくらい聞けクソガキ」

「じつと、骨ばった拳で小突かれた。」

【十字架のキズアート】（後書き）

## 【掃除屋と情報屋】

謙信真田は、名字と名前が逆転したような名前をしている。

名字は謙信。名前は真田。タバコをくわえ、無精ひげがはえているあごをいつも撫でている。

だぼつとしたズボンをサスペンダーで吊っており、サックスのシヤツに不釣り合いなアウターを着ている。

「今日もハデにやってくれたなあ、ガキ」

「絶といると歯止め利かないんですよ」

「……お前と絶ってどーい関係なんだか」

ぼりぼりと頬をかきながら、真田はバックから清掃用具をとりだす。

清掃用具といっても、デッキブラシとホースだけだ。

「つたく、人の残骸つーのは、気持ち悪くてかなわんな」

真田はデッキブラシの柄のほうで残骸を囲むようにガリガリと円を描く。時折「うつ」と目をそらすのは、肉塊がえげつないほど腐食し、紫と青を混ぜたような色の肉が異臭を放っているからだろう。円を描きながら、真田はぶつぶつと呪文を唱える。

「パスキー・ゴチェ」

真田が唱えると、肉塊の周りに薄く縄の網が張った。

司も言ってみようかと思った。まだ真田の呪文に掛かっていない肉塊から指を一本拝借し、近くにあったスパナで円を描く。

「パスキー・ゴチエ」

唱えた途端、腐敗した指が金網にぐるぐるされバチインと司の額に勢いよく当たった。額に赤く網の痕がついてしまった。

「なあにやつてるんだガキ」

遠くで真田が司の失態を見て笑った。

「四天王でも失敗するんだな。呪文が違うんだよ。ゴチエじゃなくてゴチエだ」

「バスキー・ゴチエ」

今度は指がゴオオツと燃え盛り、灰となった。それを見てまた真田が笑った。一体どう唱えたら真田のように成功するのか。

「……ごほっ」

司は黒い煙を吐き出した。

全ての残骸に呪文を唱えおえた真田は司の隣に並び、固くまぶたを閉じてデッキブラシを構える。

「チストカ・ヴヴォーラ」

縄の網が回転し、やかてつむじ風となって司や真田のコートを翻させたそれが消えると同時に、肉の残骸も異臭も消え去っていた。

真田がかけた呪文は【清掃】の呪文で、風とともに対象となるものを消滅させる、というものだ。

メインの仕事が終了した真田は、ホースを近くにあった消火栓につなが、水を撒きながらブラシで血痕を落としていく。

司は消火栓の上に登り、その様子をただ眺めていた。

「……おい、お前も手伝えや」

真田がホースの口をすばませ、司に向かって水を噴射した。

「バ・エーラ」

簡易的な結界を張り、司はそれを跳ね返した。

「おっもしろくねあなあガキ」

真田は司がここでも動かないことを知っている。

司は真田が手伝わなくても最後までやってくれるよくできたおじさんだと知っている。

結局最後まで、司は真田を手伝わなかった。

「んなもんだろ」

「キレイになりましたね」

ピカピカと輝く石畳を感嘆と眺める。そこだけ新しく敷き変えたかのようにきれいになっていた。

「おいガキ。俺思ったんだけど」

「何をですか？」

ふああとあくびをすると、強引にあごをつかまれ閉じられた。

「お前四天王だろが。俺なんか呼ばなくても自分で掃除できるだろ」

「……これが掃除だと思いますか？」

司は口の中で呪文を転がした。

と、地響きが起こり、目の前の石畳が中に舞い上がり、

バゴオン！！

爆発した。

ぱらぱらと砂利が降ってくる。

「自分が使える消滅の呪文は、あとはこれですかね」

もういちど口の中で呪文を唱えると、今度はボゴツと目の前に大きな穴が開いた。

真田は司の後頭部をひっぱたいた。

「街ん中に穴開けてどーすんだよ無計画ガキ。チストカ・ヴヴォーラって言ってみろってんだよ」

「消滅対象は？」

「あの一番でつかい石でいいだろ」

真田は親指で一番大きな石を指す。それに向かって、

「チストカ・ヴヴォーラ」

言ってみたが、反応はなかった。

真田は目を丸くした

「四天王でも出来ないことっつーのはあるんだな。司でも」

「自分が子供だったら分かりませんでしたけど、もういい年なので習得は難しいです」



「習得、ねえ。俺はちつちええ頃から使ってつからわかんね。つつかまだ若いだろガキ」

習得というのは、呪術を覚えることだ。子供の頃は吸収がよく習得も早くできるのだが、歳を重ねるにつれ習得が難しくなっていく。司の場合は、生きていく、守護者の四天王として求められる呪術はもう習得済みのため、特に新しいのを覚えようと思うことはなかった。

呪術は大多数の人間は使えないのだ。つまり使えなくても生きていけるという事実が司から向上心を奪っていた。ふと振り返ると、視界の斜め上に窓から身を乗り出した好奇心と向上心のかたまりの光希が見えた。光希が手を振ってきたので、司も手を振り返す。

「司みてえな面倒見の悪い男が子供育ててるなんて、考えらんねえな」

「……光希も、幸村さんのような面倒見のいいおじさんのそばにいたほうが幸せなんですかね」

自分で言っただけ感傷的な気持ちになった。しかしそれを打ち壊すように「ゆきむらあ？」と間抜けな声が聞こえた。

「幸村って誰だ幸村って」

「あれ、知りませんか？ 真田幸村」

「知るわけねえだろ」

「戦国武将です。豊臣秀吉に仕えてました。赤い鎧がよく似合うやつこいい人ですよ」

「……戦国時代って、うん千年前の時代だろ。旧文化人より前の人間を俺が知ってると思うか？ 旧文化人マニア」

「謙信さんって情報屋じゃないですか」

「俺が取り扱ってるのは現代の情報だ。4桁前の情報は持つてねえ」

新しいタバコをくわえ、真田はマッチを取り出した。この世界にライターなんてものはないのだ。

煙を吸うと、真田は幸せそうな顔になった。そんなにタバコはおいしいのか。

「タバコっておいしいんですか？」

「ガキは吸っていいもんじゃねけどな。大人の楽しみだ」

ふうつと真田は司に向かって煙を吐き出した。煙くてむせそうになった司はタバコなんて吸いたくないと思った。

「で、今度はどこにいくんだ？」

唐突に話題を変えられ、司はしばらく意味が分からず黙りこくっていた。

「……ベルギーのフランドル地方にいきます」

やっと意味が飲み込めた司は答えた。

「それについてなにか情報ありませんか？」

「フランドルかぁ。フランドルつつたら信頼されている司教の話が有名だな。最後の演奏者だかなんだか。そーいや一ついいもんがある。ちよつと待つてろ」

真田は持参してきたバックから2枚の紙を取り出した。

「やる」

司はそれを受け取る。それは切符だった。

「この街を抜けて、東京に行け。そこから直行でベルギーまでの便が出る」

「汽車……ですよね？」

「そうだ。指定席の切符。たまたま仲間からもらったんでな。フランドルに近いかどうかは分かんが、首都にはいけるだろう」

「頂いていいんですか？」

「俺は使わんからな。使ってもらうやつに渡したほうが切符も幸せだろう」

「……ありがとうございます」

笑顔で礼を言うと、真田は笑顔で手のひらを向けてきた。

「はい？」

「はいじゃねえ。報酬。ギブアンドテイク」

ほらほらと真田は手のひらを突き出してくる。仕方なく司は、とっておきのブツを渡すことにした。

「分かりました。今から持ってくるんでちょっと待っててください」

司は宿へ引き返した。

中では光希がうるちよると、あまる体力を発散するように動き回っていた。

「あ、司さんおかえりなさい！」

ぴよいんと光希は司にコアラのように抱きついてきた。身体に対

して頭の比率が大きく、上から見ると肩が頼りなく見える。

「光希、準備はできてるか？」

「はい！ できてます！」

「出発するぞ」

「はい！」

光希は元気よく返事をし、自分の身の回りの支度をした。司もバツグを背負い、準備を整えた。

ドアから出ようとした光希の肩を掴み、引き寄せた。

「行かないんですか？」

光希は上を向き、大きな目をくるとまわして問いかけてきた。

「行くよ。でも窓から飛び降りようか」

「え？」

「先に窓に行ってて」

光希を窓に行かせ、司はそつとドアを開ける。

「うっ」

鼻がもげそうなほどの悪臭がお出迎えしてくれた。もうそこにヒトはなく、あるのは腐敗しつくし、黒ずんで一部が陥没し、ハエが群がる醜い物体だった。

その上に、司はとっておきのエロ本を投げた。これは守護者協会が一番のプレイボーイである長瀬からもらったものだ。

一回も開いたことはなかったが、役にはたってくれた。司は満足してドアを閉める。

「しっかり捕まってよ」

光希を抱きかかえた司は、窓から飛び降りた。光希は小さく「ひあー」と叫んだ。

地面につき、光希を降ろすと、近寄ってきた真田にまた頭をひっぱたかれた。

「子供抱えて飛び降りるったーどーいう了見だ」

それだけ言い、真田は光希の頭を撫で始めた。

「久しぶりだな光希君。元気だったか」

「はい。元気でした。謙信さんは元気でしたか？」

「おう、元気よ。このものぐさな兄ちゃんにいじめてられねえか？ご飯はきちんと食ってるか？」

「はい！いつもおなかいっぱい食べさせてくれます」

二人は楽しそうに話す。

「司に嫌気が差したら俺んどこにこい。待ってから」

光希はあいまいに笑った。大人を氣遣って肯定しないでいるのだろっ。よくできた子だ。

「で、司、報酬は？」

「あの宿のスイートルームの前に置いておきました」

「なんでまたそんなめんどくせえことするんだよ。まあいいか。じゃ、気をつけるよ」

真田は司と光希の頭に手を置いた。  
骨ばってかさついた手で行われたその仕草に、不思議と、元気が  
出た。

ニホンの首都東京は、イギリスやアメリカを押さえ、世界最大の  
ハブターミナルとなっている。

行き交う人にまぎれてどこかに行ってしまったまいよう、光希の手  
をしっかり握る。

「機関車だあ！　ほんものだあ！」

きやつきやと小さな手を振り回しながら光希は笑う。楽しそうで  
なによりだ。

「ね、ね、司さん。コレにのるんですか？」

「うん。汽車に乗って出掛けるよ」

「やったあー！」

光希は飛び上がって喜んだ。司は汽車を見て喜ぶことはないのだ  
が、子供はこういうものが好きらしい。

今度、汽車の模型でも買ってあげようか。

「司さん！　早く！　早く！」

つないだ手をぐいぐいとひっぱり、光希は先を急いだ。

切符に書かれていたナンバーから席のある汽車を探し出し、光希  
にひっぱられるようにして乗り込んだ。

gallery 1 碧尉司

【碧尉 司・アオイ ツカサ】

170cm 守護者 四天王 武器Ⅱ 『紅桜』（日本刀）

地殻変動前の二ホンで医者として栄えた旧家の末裔。先祖を尊敬している。

憂いを帯びた見た目で、希少な色の髪を持つ美男子だが、本人はめんどくさがりで基本逃げ腰及び腰の自由奔放な性格。目が大きいのは家系。

守護者協会の四天王の一人だが、協会の極秘書類持ち出して旅に生まくるやつかいな人物。

【日本刀を操る闇】を探している。

武器はこんな感じです。

> i 14294 — 1919 <

刀身：85cm 柄：20cm 鞘：85.5cm

2000年前の戦国時代製。まだまだ現役の妖刀。

gallery1 碧尉司 (後書き)

司は翼にブラコンのようです。

翼が生きていて司のお兄ちゃんだったら凄いことになってただろ  
うな。



## gallery 2 京極絶

【京極 絶・キョウゴク ゼツ】

170cm 革命家 四天王 武器Ⅱ『大鎌』

残虐極まりない革命家の四天王。人殺しに愛を注いでおり、気分次第で味方も殺す。

通称『Kill Devil』

金髪に毒々しいほど赤い瞳を持っており、服は全身黒尽くめ。

『True blood』を手に入れたら世界を蹂躪したいと思っている。

司に異様なまでに執着している。大鎌は約2mと巨大。

> i 1 4 2 8 0 — 1 9 1 9 <

イラストは空影零夜様に描いていただきました。

武器はこちら

> i 1 4 2 9 5 — 1 9 1 9 <

大雑把に2mの設定。

重そうです。

gallery2 京極絶 (後書き)

絶は個人的に大好きなこです。  
絶って司のこと愛してるんだと思います。  
いろんな意味で。

## 【回想】

スチームが効きすぎて暑い車内で、司はアウターを脱ぐ。車窓に手を付き外を楽しそうに眺めている光希のコートも脱がせてやった。真田がくれたチケットの列車は、A B CでいうとBランクの列車だった。一般席は人でごった返し、蒸れた空気が漂ってくる。しかし個室に座ることが出来たためあまり気にならなかった。

真田真田と噂をすればなんとやら。膝に抱えたリュックサックのどこかのポケットに入っている携帯電話が振動した。今のところ携帯電話のアドレス帳には真田の名前しか入っていないため、これを振動させることのできる人間は真田しかないのだ。

緩慢な手つきでリュックサックを探り、ここでもないここでもないと繰り返し返していると、振動が止まった。しかし数秒後、また振動した。

司はリュックを探る。だがどれだけ探しても見つからなかった。

(……あ)

思い出した。

「光希、光希、電話くれ」

「はい」

光希はウエストポーチから、黒い携帯電話を取り出し、司に渡した。そういえばさっき光希に持ってた頼んであったことを思い出したのだ。

通話ボタンを押すと、スピーカーが壊れたかと思うくらい大きな音が出た。どうやら真田は怒っているらしい。

『つかさあー！！ 部屋の前になんちゅー置き土産しとんじゃあー！！』

なんだか協会長を思い出す。

「気に入りませんでした？ 一応守護者協会のほうに必要経費で領収書きってもらったので、そのうち伝書鳩郵便が行くと思います」

『そっちじゃないっ！ なんで人が死んでるんだ！！ 心臓止まるかと思っただわ！！』

「なんでって、死んでるから死んでるんじゃないですか。あ、それ鎖付きですよ<sup>シェーブ</sup>」

『屁理屈言うな！ 仕事残ってんなら素直に言え！ つーか四天王なら習得簡単だろが！』

「えゝ、確かに一般人よりは簡単ですけど。めんどくさいです」

あくびをかみ殺しながら本音を言う。世の中にめんどくさいほど司にピッタリな言葉はあるだろうか。

『めんどくさいで片付けんな！ 未来を担う若者がそんなんじゃない二ホンの未来は危ないぞ！ 教えてやっから覚えろ！』

「教えるのはいいですけど、真田さんここまで来てくれますか？

ここもう二ホンじゃないですよ」

窓の外の風景は、異国のものになっていた。家のつくりや町並みが二ホンと違うのだ。

それにしても真田もしつこい。司はさっきも断ったはずだ。覚えたくないのになぜ教えようとするのか。どうしたら諦めてくれるのだろうか。

そつだ。

「……どうしても覚えてほしいんですか？」

『どうしても覚えてほしいな』

「じゃあ、真田さんの心臓ください」

ヒクリと、携帯電話の向こうの真田の喉がなった。

習得には2つの道がある。

一つは、地道に練習を積み重ねて覚える道。

もう一つは、すでに習得している人間の心臓を食べ、その力を継承する道。

そんなに覚えてほしいのなら心臓下さいと、そうすれば手っ取り早く覚えることが出来ますよと、司はそう言ったのだ。

但し、冗談で。

心臓なんて切羽詰った状況でなければ食べたいとは思わない。

「冗談ですよ」

『冗談でもそんなこと言うなクソガキ。血圧上がったじゃないか』

はぁーと真田は長い息をついた。

「とりあえず自分は覚えません。てことで話題変えます。ベルギーのフランドルについて、もっと詳しい情報ありませんか？」

『……脈絡のないガキめ。ちょっと待ってろ』

真田の声が遠ざかり、紙をめくる音がした。手帳かなんかにメモをしたものを探しているようだ。

『あつたあつた。えーと、さっき言いかけたことから言うから、メモれ』

「……はい。準備しました」

『ベルギーのフランドル地方には、鐘楼群があるんだ。鐘楼っつー

のは、教会とか寺院のなかにある鐘のことだ。その鐘楼は、今はほとんど歯車で動かしてるんだが、昔はピアノを引く要領で人が鳴らしてたんだ。今ではその絶対数が減ってしまっただけ、たった一人になっちゃった。それが、信頼されている司教だ」

「信頼されている司教」

「そうだ。名前はファン・ハウセン。60代のじじいだ。クソガキが言ってた世界遺産の教会に住んでる」

「ファン・ハウセン。メッヘレンに住むクソじじい」

司はクソガキとじじいをごっちゃにした。

「おい、誰がクソじじいって言った」

「今、真田さんが」

「屁理屈こくな」

電話越しでも頭を叩かれたような気がした。

その後も説教を右から左へ聞き流していると、構ってほしそうにこちらをじつと見つめる光希に気づく。

おいでと口パクし、手招きをすると光希は嬉しそうに近寄ってきた。膝の上に座らせ、頭を撫でながらまたケイタイに耳を傾ける。

「おいっ、聞いてんのかクソガキ」

「……え？」

「その様子じゃ聞いてねえな。まあお前さんのことだから仕方ないか」

諦めたようにぼりぼりと頭をかく音が聞こえた。

「とりあえず、俺が知ってるのはそこまでだ。何か聞きたいことがあるか？」

「聞きたいこと、ですか」

司はしばし考える。そして思いついた。

「日本刀を操る闇」について、なんか知りませんか？」

“日本刀を操る闇”、司がずっと追いつけている男。

『またそいつか。なんで『True blood』じゃなくてそいつを探すんだ？』

理由を求められ、司は目を閉じて答える。  
最初に日本刀を操る闇に会ったのは、司がまだ子供の頃。いつもの如く実家の蔵を漁っていたときだった。

面白い？

いきなり背後で声が響き、司は盛大に身を跳ねさせた。バツと振り返ると、古びて小汚い蔵にはやけに場違いな、異質な男が立っていた。

薄暗いせいでよく見えなかったが、髪の毛は司と同じ、それよりもかなり濃くて艶のある二ホン・ブラック。黒いコートの下に着ている服はどこか見覚えのある漆黒の、ブレザーと呼ばれるもので、あとで昔の高校生が着ていた制服だと知った。

手にはスクールバッグと、刀身がとてつもなく長い日本刀。  
全身が闇のように黒かった。

『だれ？』

幼い司が警戒心もなく問いかけると、その男は微笑んだ。その笑

みに、どこか懐かしさを感じた

君に一番近い人、かな？

司に一番近い人？ まだ拙い知恵しかない頭で必死に考える。

父親や母親や、祖父母や親戚や、手当たりしだい目の前の男に自分に近い人を当てはめてみた。しかし、ぴったり当てはまる人はいなかった。

まとうているオーラが、とても特徴的なのだ。

端麗な雰囲気は硬すぎず、柔らかすぎず。存在はハッキリとしているのに、目を離すと消えていつてしまいそうなくらい儚げで。淡く幼いようでいて、濃く大人の影が見え隠れする。寛容で全てのもを受け入れそうなのに、剣呑で常に牙をむくなにかがそれを打ち消してしまっている。

それが、この世には異質だった。そして声も異質だった。

目の前で発せられているはずなのに、まるで遠くから反射を利用して運ばれたような、頭の中で幾度も反響して膨張する声。

矛盾の塊。そう思った。

『ねえ、顔見せて』

薄暗いせいで顔がよく見えない。しっかり見たら誰だかわかるかもしれない。近づくと、ふわっと煙のように男の姿は消え、見えなくなった。

お化けだったのかな。大きい頭を傾げたが、特に気にも留めず司は漁りを再開した。

次の日も、朝早くから懷中電灯を持って蔵に出掛け、手当たりしだい引つ掻き回して満足していたとき、またその男が現れた。

物音一つ立てず。



見たら、きちんと片付けようね。

闇のような男は澄んだ声で聴し、司が興味を失ったものから元の場所に片付けていった。はじめはその様子をただ眺めていた司だったが、なんだか申し訳なくなってきた、隣にしゃがんで一緒に後片付けをした。

やればできるね。さすが司君だ

ぱんぱんと制服についた埃を払った男に、頭を撫でられた。その手は心地よかったが、どうも腑に落ちない点があった。

「ねえ、なんで自分の名前知ってるの？」

教えてもないのになぜ知っているのか。司の名前は名字と共に世間に広く知られていることも忘れて問いかけた。

男は少し考えをめぐらせた。

僕が、君の……だから

え？

肝心なところが聞こえなかった。聞き返そうとしたが、男は昨日同様消えていった。

なんなのだろう。きれいになった蔵を眺めながら、何度もそう思った。

次の日は、前々から目をつけていた、やけに大きな木の箱をひっくり返してみようと思った。

まずは周りの邪魔な箱や布をどかし、埃を払う。ばっさばっさと扇いだせいで木屑が派手に中を舞い、露骨に吸い込んで大きくむせた。

腕をいっぱいに広げ、木箱の蓋を開けにかかる。こめかみに青筋を走らせ、ぐぬぬぬ……と力を出してみるが、蓋は簡単には開いてくれなかった。

休憩を挟み、持参してきたおにぎりにかぶりついてから作業を再開する。しかし司の小さな腕力では到底開けることができず、半ば絶望的な気持ちになっていたときだった。

### セサム・オクトウロイス

呪文が聞こえ、バゴツと木箱の釘が抜け落ちた。振り向くと、やはりそこにはあの闇のような男が立っていた。

釘を抜かないと、司君の力じゃ開かないよ

飛ばされた釘を遠隔操作の呪文で浮かしながら、男は笑った。木箱のことは一瞬忘れて、司は瞳に憧憬の色を携えながら男を見上げた。その顔はいつになくキラキラとしており、子供ならではの好奇心で満ち溢れていた。

『呪文、使えるの！？』

問うと、男は緩慢に頷いた。更に司の目が輝く。

書籍でしか目にした事がない呪文。重たいものを持ち上げたり、結界を張ったり、つむじ風を起こしたり、妖怪を退治したりできる。何でもできる魔法。司はそれにすこぶる憧れていた。

いいな、いいな、いいな。どうやって覚えたのだろう。どうやって使うことができるのだろう。小さな司の向上心は留まるところを知らない。

司君も、じきに使えるようになるよ。それも強大なものをね

『本当！？』

男に肯定され、飛び上がって喜んだ。

開かれた木箱を上から覗き込み、腕をつつ込んでモノを引っ張り出す。放り投げたものが土の床に落ち、粉塵を上げた。

これはまた豪快な子だね。一体なにを探しているの？

『ご先祖様の遺物』

ご先祖様？

『うん。翼って人の遺物、さがしてるの』

ピタリと、男の動きが止まった。翼という名前に反応して。

『どうしたの？』

……何でもないよ。それより、どうして翼の遺物を探しているの？

男の問いに、司はありったけの翼への想いを語りつくした。それを聞いて、何故か男は嬉しそうにしていた。

この男も、翼が好きなかもしれない。趣味が一緒だから、共感してるのか。

注意力を思考に取られた隙に、

『ッー！』

左手のひらに痛みが走った。涙目になりながら腕を引き抜くと、太い木片がぐっさり親指の付け根にかなり深く刺さっていた。

事件現場を目撃したことによる視覚的な痛みが直接的な痛みと混ざり合い、痛みが二乗になった。司の大きく青い目から涙が溢れる。引き抜こうと震える右手で木片を触る。しかしばやけた視界で狙

いが定まらず、病んだようにブルブルと震え続ける手は動きを誤り、更に己の身体に異物を挿入する羽目になった。

『ふっ……ふあっ』

滲む赤い血液が涙をまた誘う。

木片から枝分かれし、毛羽立って鋭い木のかけらが接触する360度全ての神経を刺激した。ひどい痛みで大人しくなんかしてられず、司は立ち上がり、なんとか苦痛を散らそうと腕を振り回したりそこら辺を走り回ったりした。

そんなことしても痛覚は晴れず、最終的に司はうずくまり、患部を撫でながらすすり泣いた。

見せてごらん

ふいに目の前に中腰になった男に、腕をとられた。患部をじっくり診察するその顔を、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で観察する。

水の膜が光を変に屈折させ、ぼやーっとしか見えなかった。ただ、どこかで見た顔だなとつつすら思った。

『らに……するの？』

目、瞑ってるといいよ

言われたとおりにぎゅっと目を瞑る。

ウィッチ・ボンル・プレート

男が唱えた呪文は司の中にスウツと入り込み、患部の痛みを取り除いた。

抜いてくれたのかな。少しでも目を開けて手を見やると、そこにはまだ木片が刺さったままだった。悲鳴を上げてもう一度目を瞑ると、冷たい液体が数滴、手のひらに滴った。傷口から液体は体内に忍び込み、じんわりと、なだめるように熱を持った。ほこほこしていて気持ちがいい。手だけお風呂に入れているみたいだ。

はい、もう目を開けていいよ

促され、おそろおそろ目を開けると、木片は見当たらなくなっていた。しかも、よく見ると傷口まで塞がっている。

『わあっ、治ってる！』

塞がった傷跡を指でたどりながら満面の笑みでお礼を言うと、男も満面の笑みを浮かべた。

『ねえ、どうして治ったの？ 呪文で？』

今のところ、傷を完全に治す呪文は見つかっていないんだ

『じゃあ、どうして？』

瞳いっぱい疑問符を浮かべながら司はねだる。教えて教えてと。さすがに男も困ったようで、満面の笑みは苦笑に変わっていた。

知りたい？

大きく頷く。

男は、遠い記憶を掘り起こすように、ゆっくりと言葉をつむぎ始めた。

……世界は、いつの間にか穢れてしまった。

唐突に始まった答えとは違う語りに、司は不満で口を尖らす。だけれどこれを聞いたら教えてもらえるのかもしれないと、興味を失うのをだけは懸命に堪えた。

大陸が全て繋がったことで人間の欲は倍増し、ささいな口論から、それはいじめになる。果てに人殺しまで厭わない者で溢れる社会が、地球上に存在していた。

それをなんとか食い止めたのが、守護者協会だった。過去の日本を見習い、天皇と総理大臣が地球を統治し、各国には大臣を置いて、中央集権国家にしようと、試みた。

討論と妥協を繰り返し、その計画が着々と進んでいたとき、邪魔者が、現れた。

革命家協会が、守護者協会に真っ向から反対したのだ。

【回想】（後書き）

微妙なところで終わりましたね^^；

## 【思い出】

『じゃまもの？』

男は鷹揚に頷く。

いわゆる、左翼と呼ばれるもの。革命家協会が現れて、守護者協会がやること成すこと片っ端から非難していったんだ。最初は、革命家協会も黙認していたんだ。一党独裁政治は国のためによくないと知っていたからね。でも、革命家協会はいきなり過激派を組織してクーデターを起こしたと思えば、今度は独自の政治を作って守護者協会の影響が少ないところから勝手に統治していったね。おまけに、そんな彼らに賛同する人民も出てきて、討幕運動のような動きを始めたんだ。

『討幕運動？』

そう。打倒守護者協会、という感じで、あちこちでデモが起きてね。今はそんなこと起きないけど、当時は鎮圧するのに随分と時間を掛けてしまったんだ。そっちに気をとられているうちに革命家はめきめき勢力を伸ばしていつて、いつしか守護者協会と肩を並べるまでに成長したんだ。ふふんと鼻を鳴らす革命家に、守護者は問うたんだ。『もうあなた方を滅ぼすつもりはない。これからは妥協して世界を統治していこう。何が望みだ、できるだけ聞こう』とね。

いったん男は言葉をきった。なにが思惑できつたのかは分からないが、ここまで聞いて待っているのも辛かったので続きを催促する。

うん。そしたら、革命家協会は、なんて言ったと思う？



意見を求められ、ぐるつと思考を巡らせる。

なんて言ったのだろうか。こんなとき革命家は守護者になんて言いたいだろうか。自分だったらなんと言っただろうか。

『……お金。示談金ほしって言う』

子供らしからぬ欲の出た答えに、男は大いに笑った。

そっか、それもあるよね。でも、正解は『チェスとチェインの呪術を教える』というものだったんだ

『どうして？　なんで呪術をおしえろってだったの？　チェスとチェインって何？』

チェスとチェインというのはね、限られた上級の呪術使いしか使えない、とても強力で、恐ろしい呪術なんだ。

『怖いのか？』

とっても。なんてったって、人の心を操るんだから。人をマリオネットにしてしまうとても恐ろしい呪術なんだよ。さて、どうしてその呪術が欲しかったのかって言うと、革命家協会はある野望を持っていたんだ。

野望、なんなのだろう。

世界征服、だって。

世界征服？　なにその安っぽい願望。

あはは、そうか、安っぽいかー。うん。やっぱり司君と僕は似てるね。いい歳した大人が世界征服なんて、確かに現実離れしていて安っぽいよね。でも、チェスとチェインにはそんな安っぽい野望さえ叶えられるほどの力があるんだ。

『ふうん』

最初はもちろん、守護者協会は抵抗したんだ。けれど、身内で一人、チェスとチェインの使い方を知った者が一人、革命家側に寝返ってしまつてね、結局は知られてしまつんだ。

そして、革命家はその力を乱用し、社会的地位のある人間から次々と手中に収めていく。守護者協会もそれを食い止めるために、呪術を使用して対抗した。

その中で、どういうわけかその呪術が一般に出回ってしまい、悪意あるものの手で街中がシエルハとシェープで溢れかえってしまった。

その日から約300年、シエルハとシェープを狩るために四天王が暗躍し、世界中が血でそまる黒歴史が始まつたという。

今はだいぶ落ち着いたけど、当時の世界は荒れに荒れててね。まるで中世ヨーロッパの魔女狩りを見ているようだったよ。

と語る男の目には、長い、悠久の時を生きて、物事全てを達観できるとような蒼い色が宿っていた。

この男、いくつだ？

ヴァンパイアみたいだ。

『ねえ、それと怪我が治つたことと、なにが関係あるの？』

もともと、司が知りたいことはそれなのに、男はまったく別の話をしだしている。

まあ、続きを聞いてごらん。革命家協会は失敗を知って、呪術で世界征服をするのを諦めたんだ。そして次に目をつけたのが、  
『True blood』なんだ。

『True blood?』

知らないかな? でもまあ、僕が言えるのはここまでだね。  
『ええっ』

ここで終わりなんて。謎だけ残していつて終わりだなんて、不完全燃焼にもほどがある。

しかも立ち上がって去ってしまおうとするから、慌てて待つてと引き止める。

別に、明日も来るかもしれないのに、なぜか今日で最後の気がした。子供の勘は、当たるものだ。

『ねえ、また会える? また会えたら、教えてくれる?』

……そうだね。また会えたら、教えてあげる。それまでに。

『それまでに?』

そうだね。それまでに、僕と釣り合う価値の人間になったら、教えてあげる。

釣り合う人間? 力を付ければいいというのか。それとも、学力を高めればいいというのか。

思い悩むと、男は深く考えなくていいと笑った。

大丈夫。また会えるから。君はそれまでに、したいことをい  
ていればいい。そうすれば、おのずと力は付いてくるよ。  
『ほんとう?』

ここで嘘ついても、僕に得はないだろう。

そこでまた、悔恨さえ漂わせず、男は消えていった。

翌日から、男は蔵に現れなかった。

翌日も、翌々日も、一週間後も、一カ月後も、一年後も、司が守

護者教会に入り、実家を出て行く前日も。

「・・・・・・・・・・というわけですよ真田さん」

色々はしよった部位はあれど、まあこういうことだ。

『ほお、随分と不思議なお化けだな。もしかして、その男が守護者協会に対して結構いいこと言ってたから、おめえさん、守護者協会に入ったのか？』

「まあ、そんなところですよ」

『はーっ、なんだか小説みたいな話だな。それでまあ、その男に会うために、呪文も覚えて、本も読んで、釣り合うよう頑張ってるってわけか』

「まあ、そんなところです」

『ほおー、たいしたもんだ。めんどくさがりのおまえさんだも、やるときゃやるんじゃないか。見直したぜ』

「まあ、それはありがたいことです」

『お前、返事めんどくさがってるだろ』

「まあ、そんなところですよ」

『・・・・・・・・・・』

真田はあきれてものも言えないようだった。

でもそこは真田、大人の男だ。ガキのきまぐれにいつまでも付きあう気はなかったようだ。

『・・・・・・・・・・なあ、司。その男、もしかしたら、True blood』だったんじゃねーか？』

「え？」

思いがけない言葉に、睡眠モードに入りつつあった司の頭は覚醒した。

『そうとしか言えないだろ。おまえさんの怪我が治ったのも、いきなりそんな話しだしたのも、最後に『True blood』って名前だけ出して消えたのも、自分が『True blood』だって気づいて欲しかったんじゃないのか？』

それは、考えもしなかった。  
でも確かに、それなら得心が行く。

「……今度会ったら、聞いてみます」  
『うん。それがいい』

ふと胸元に目をやると、光希がやすやすと寝息を立てていた。  
長電話の最中に寝てしまったらしい。寝汗で額にはりついてしまっている前髪をそつとかきあげた。

「……すいません、光希がねちゃったので、切ってもいいですか？」

『おう、いいぞ。にしても光希君の寝顔が、きつとかわいいんだろ  
うな』

「かなり可愛いですよ。食べちゃいたいくらい」

窓の外は、とつぷりと暮れていた。今日は汽車で一夜を明かすことになりそうだ。

「それじゃ、おやすみなさ」  
『ちよいまち。いつこだけ聞かせてくれ』

一個だけなら、まあいいか。なんですかと先を促す。

『おまえさん、その男のことを『日本刀を操る闇』って呼んでたよな』

「？ はい。呼んでましたけど」

『闇は分かる。その、“日本刀を操る”部分はどこから持ってきた？』

「ああ、それですか」

ガタンと、汽車の車体が一度大きく揺れた。

「単なる、イメージです」

呆れたような真田のため息と一緒に、もう一度車体が揺れた。ベルギーまで、もう少しだ。

## 【思い出】（後書き）

約一ヶ月ぶりですね^^； 筆不精ですみません。  
みなさん、よいお年を。

追伸、投票を設置したのでよかったらこちらもどうぞ。

【<http://vote1.fc2.com/poll?mode=browse&amp;uid=6895702&amp;no=2>】

## 【到着】

眠そうに目を擦る光希の手を引いて、汽車から降りる。

朝日がまぶしい駅のホームは、パンパンに膨らんだキャリーケースを引く人でごった返していた。老若男女問わず、みなアメリカゴールドラッシュ期や世界恐慌時を彷彿とさせる服を着ている。茶色が主調色の人間の中で、灰緑色と藍色の服を着た司と光希は浮いていた。

見上げた先にある看板には、フランス語とオランダ語で『ベルギー・フランドル』と書かれている。

着いたのだ。目的地に。

改札を抜けて、構内で地図をもらい、駅を出る。

不ぞろいでボコボコの石畳が、司たちを迎えてくれた。

春のベルギーは、穏やかな空気に包まれている。

フランドル地方。今回はベルギーに来たが、実際はオランダ南部、ベルギー西部、フランス北部にかけての地域であり、イタリアのヴェネツィアと共に、レース創造の地として有名である。

歴史的景観がともに残っており、剥がれかけた赤いレンガの壁や、小さな窓がたくさんついた高い建物が、中世にタイムスリップしたのかと勘違いさせてくれる。

また、今回の最終目的地が鐘楼であるように、フランドル地方は教会が多い。少し視線を上げれば、八角形でクリーム色の塔を有する教会が見える。少し傾いているのが、年季を感じさせる。

「司さん。ベルギーといったら、何が有名なんですか？」

「ん？ ん……………」

光希の無邪気な質問に、司は首をひねる。レンガで簡単に舗装さ



れた川べりに腰掛け、戯れる二匹の白鳥を観察しながら、ベルギーの特徴を考える。

周りにあるドイツ、フランス、オランダの特徴ならすぐに思い浮かぶのだが、ベルギーと言われると、すぐには思いつかない。

「ん．．．．．、チヨコレートとか、かな」

「チヨコですか!？」

光希の目がパツと輝いた。

「うん。チヨコレート。昔の日本でも、デパートでゴディバのチヨコレートが売られていたよ。あとは、ワッフルとか、フライドポテトとかかな．．．．．」

断定的な口調で言えないのは、当たっているかどうか分からないから。本で得た知識なのだから外れている可能性は少ないのだが、ベルギーに関してはあまり多くの文献を読んでいないため、その得た知識というのが果たして正解なのか否なのか、判別しかねる。

手っ取り早く確認するため、ちようど後ろを通りかかった女性に聞いてみることにした。服についた埃を払い、立ち上がる。

「すみません」

「はい？」

訝しげに振り返った女性は、司を見て笑顔になった。

ふんわり内巻きのセミロングを赤いカチューシャで留めている。

ロングのスカートを履いていて、手には楽譜が挟まれたファイルが載っている。

「少しお時間、よろしいですか？」

「ええ。どうぞ」

「ありがとうございます」

ニコ、と笑うと、女性の笑みも深くなった。  
もしかして、司の容姿が気に入ったのかもしれない。

「ベルギーといったら、何が有名ですか？」

「有名なものですか？　そうですねえ……あなたは、観光でここにいらしたの？」

「まあ、そんなところです。鐘楼を見に来ました」

「あら、それならカリヨンも聞いてみてはいかがですか？」

「カリヨン？」

「はい。あ、ほら、今鳴ってます」

女性が口を閉じ、耳を澄ましたので、司も耳を澄ます。いつの間にか足元に来ていた光希も、目を閉じている。

「………あ」

聞こえた。

幾重にも重なりあう、鐘の音。音の重さから、かなり大きな鐘なのだと推測できた。

演奏が終わっても、音の余韻はしばらく消えなかった。

「………ね、素敵な音色でしょう？」

「はい。とても」

「私達の目覚めから城門を閉じるまで、十五分おきに鐘楼は鳴っていたの。今は一時間おきですけれど。………あら、この子はどちらの子？」

光希に気づいた女性は話をやめ、司に質問してきた。

「この子ですか？ 光希と言います」

「もしかして……あなたの息子さん!？」

「いいえ、ちがいますよ。兄弟みたいなものです」

「あら、そうなのですか」

女性は驚いた表情をして、息子じゃないと分かると、幾分ホツとした顔つきになった。

身をかがめ、光希と目線を合わせる。

「コウキくん？ こんにちは。私はクロエよ。お年はいくつ？」

「こんにちは。えと、六歳です」

「そうなの。どうしてベルギーに来たの？」

「あの、鐘楼を見にきました」

「お兄さんと二人で？」

「はい」

「まあ、偉いのね」

よしよしと、クロエは光希の頭を撫でた。

と、光希のお腹がグウ……と音を上げた。

そつえばこの子は、汽車の中でお菓子に手をつけていなかった。

「あら、お腹空いた？」

光希は恥ずかしそうにコクンとうなずいた。クロエはしばらく考え込み、立ち上がってこう述べた。

「よろしかったら、私の家にいらっしやいませんか？ ベルギーの有名ではありませんけど、家庭料理程度なら振舞えますよ」

あまりにも意外だったので、司の返事が一泊遅れ、クロエの表情が少し曇る。

「クロエさんは、迷惑ではないんですか？」

「ええ。どうせ一人暮らしですし。特に尋ねてくる人もいませんし」

「でも自分ら、今日会ったばかりですよ？ 信用していいんですか？」

「あら、そんなこと、コウキくんの目を見れば分かりますよ。この子、後ろめたい目をしていないもの。だから大丈夫」

そんな安易な理由で、他人を信用してもいいのだろうか。

断る理由も特になく、光希のお腹が満たされるなら、と考えた司は、クロエに着いて行くことにした。

## 【クロエとエディ】

「まあ、では司さんは世界中を旅していらっしゃるの？」  
「ええ」

クロエの家で用意してくれた食事をすまし、司はテーブルを挟んでクロエと向かい合っている。光希はリビングでタルト・オ・マトン      ベルギーの郷土菓子      を齧りながら、クロエの弟に構ってもらっている。

「あなたはどのクニの出身のですか？      ……あ、待って、私が当ててもいいかしら？」  
「どうぞ」

クロエは司を舐めるように検分し、どこの出身なのか当てようとする。

「うーん……あ、もしかして、中国人かしら？」  
「いえ、違います。日本です」

直後、クロエの眉根が不審者でも見たかのように寄せられた。

「………本当ですか？      本当に日本人だというなら、証明書をお持ちですよ。見せていただけますか？」  
「いいですよ」

リュックサックの奥のほうからパスポートの形をしたものを二冊取り出し、訝しむクロエの前に提示する。その中を確認したクロエの顔がパツと輝いた。

「まあ、本物の日本の方と会えるなんて！ 私感激です！ しかも  
守護者協会の四天王だなんて！？ 握手、していただいてもいいで  
すか？」

感激した様子で握手を求められたので、司は応じる。

日本という名前のブランド力は、今も昔も変わらず強い。手作業  
で温かみのある製品を作り出し守護者協会の本部が置かれていると  
いう事実が日本のブランド力を高めていた。

そのため、悪用されるケースが多いのだ。

主に中国人や韓国人など、顔立ちが日本人に似ている人間が日本  
国籍を騙り、詐欺を働いたり高価な物品を売りつけたりする。そん  
なことが横行すると日本のブランド力が下がると考えた革命家協会  
は、日本人全員に国籍証明書というものを発行した。いわゆるパス  
ポートだ。守護者協会もそれを承認し、これがあれば自分は日本人  
だと証明することが出来る。

証明書の一つ一つにGPSが組み込まれており、盗難されたり紛  
失した場合は協会の人間が世界の果てまで回収しに行ってくれる。  
偽造の心配はほばない。万が一偽造が見つかった場合は、言うの  
も憚るような制裁が                      主に革命家協会から                      加えられ  
る。

ちなみに同時に提出したのは、守護者協会の会員証だ。顔写真と  
肩書きが書かれている。

「本当、中国人なんかとまちがえてしまっでごめんなさい。でも、  
今まで日本人だと騙ってきた中国人に何度もだまされて、極東の顔  
立ちを見るとどうしても中国人だと思ってしまうの。そうよ。今思  
えば、こうしてパスポートを見せてもらえばよかったんだわ」

「仕方ありませんよ。顔立ちが似ているのは本当ですし、クロエさ  
んも過去に騙された経験があるのですから間違えてしまっても仕方

ありません。クロエさんに非はありませんよ」

「まあ、ありがとう。こういう応対も中国人や韓国人とは大違いね。あの人たちは私が言うことを聞かないと分かると、すぐ暴力に走ってきたんですよ。そのときはたまたま弟のエディがいたからよかったけれど、いかなかったら私、今頃どうなってたかしら……」

悲しげに目を伏せ、中国人や韓国人にかなり横暴な態度を取られたことが推測できるクロエを慰めようと、光希を構ってくれているエディという年若い男性が話に混ざってきた。

「ちよつと姉さん、せつかく日本からお客さんがやってきたんだから、そんな暗い話してないでもつと明るい話しなよ。それと、そのことまだ引きずってるなら実家帰ってきなよ。父さんたちも心配してたよ」

「そうよね。せつかく日本からいらしてくれただもの、色んな話を聞かなくちゃ損よね。あと、お父さんに言っておいて。私帰るつもりはないって。たまに顔出すくらいでいいでしょって」

「姉さんはいつもそれじゃないか。そう言っただけで帰ってきたためしがないよ」

「別にいいじゃない。私は私の生活を満喫してるの。さ、そんな家庭事情は置いておいて。私、日本にすつごく興味があるの。日本のこと、話してもらっていいかしら？」

「ええ、いいですよ」

音楽や民謡について話して欲しいと頼まれたので、奈良時代に中国から伝来した箏や、伝統舞踊の話をした。

北はソーラン節、南は琉球舞踊。間に会津磐梯山や阿波踊りを挟んでいると、クロエの反応が薄いことに気づく。試しに楽器の話に戻すと今度は食いついてきた。クロエは音楽は音楽でも楽器、それも打楽器が好きなのだと分かった。

「日本固有の打楽器というと、せいぜい和太鼓くらいですね」

「和太鼓？ ああ、聞いたことあります。バスタームのようなものでしょう？」

「そうですね。でも革の材質が違うので、雅な音がしますよ」

「ミヤビな音？ 一度聞いてみたいわあ」

コロコロと笑いながらクロエは話に聞き入っている。ここまで楽器が好きな人には、何か理由があるんだろうな。初めて会ったときも、楽譜を抱えていたし。

「クロエさんは、楽器がお好きなのですね」

さりげなく聞くと、クロエはうなずいた。

「ええ。小さいころは様々な楽器に触れていたけれど、今はカリヨン一筋なの。今のカリヨンは全て歯車で鳴らしているのだけれど、昔ながらのやり方……手作業で鳴らせる教会が一つだけ残っているの。その司教様に演奏方法を習っているのよ」

ふうん。

「全て歯車で演奏しているのなら、人間が演奏する機会はないのではないですか？」

「いいえ、一日初めと一日の終わりのカリヨンは人の手で鳴らしているところがあるの。メッヘレンの鐘楼というのだけれど、そこなら演奏できるんです」

へえ。

司は表情に出さない程度に聞き流していた。だが、メッヘレンと



いう単語には反応する。

視線を横に流すと、光希がエディに積み木を使って遊んでもらっている。人懐っこいのはいいことだ。

「司さんは、ベルギーの何を観光しに来たの？」

名を呼ばれたので、司は視線を戻す。ティーカップを差し出されたので礼を言つて受け取り、一口含んでから答える。

「鐘楼……がメインですね。あとは人を探しています」

「あら、この広い世界で人探しをしているの？ それは大変ね。誰を探しているのですか？」

「今は、ファン・ハウセンという六十過ぎのおじいさんを探しています。フランドルのどこかの教会に住んでいると聞いたので」

『日本刀を操る闇』の名は、この場では出さなかった。以前にこの名前を出したって答えなど返ってくるはずが無いことくらい分かっている。だって司が勝手に考えたあだ名だし。

ファン・ハウセンの方にはクロエも思い当たる節が合ったようで、ピコン、と頭に豆電球がついたような顔になっている。

「その方、私、知っていますよ」

「本当ですか」

「ええ。私がカリヨンを習っている司教様の名前がファン・ハウセンと言うの。メッヘレンでその名前っていったらその方しか思い浮かばないので、合っていると思います」

「そうなんですか。じゃあ、明日にでも会いに行こうかな」

と言った段で、はて、会って何をしたいのだろうと思いつく。する話もないし。言いたいこともないし。カリヨンを学びたいわ

けでもないし。

「…………でも、一応会ってみるにこしたことはないかな。」

「よかつたら明日、私から紹介しましょうか？」

「ファン・ハウセンをですか？」

「ええ」

これはいい話の流れだ。いきなり訪問するより間にワンクッションあったほうが先方もこちらを不審からないだろう。

「明日もレッスンがあるんです。そのとき一緒に付いて来て下さい。ねえエディ、紹介しても大丈夫よね？」

「オレは別にいいと思うけど……………」

「じゃあ決まりですね。明日の午前十時前にここにいらして下さい」

まだ何か言いたげなエディを遮り、クロエは時間を指定する。

午前十時前。早朝だな。了承し、紅茶を飲み干す。

「ご馳走様でした。あと素敵な情報、ありがとうございました。光希も構っていただいて」

最後の一言はエディに向けて言うと、エディは『子供は好きなので』と返してきた。

光希はエディのひざの上に載っていて本を広げていたが、帰り支度をしないといけないと悟ったのだろう。パタンとそれを閉じてエディに礼を言い、司の足元にやってきた。

「あら、お帰りになるの？ 今日はこちらにお泊りで？」

「とりあえず近場の宿に泊まろうと思います」

「そうですか。では、玄関まで送ります。エディもほら」

玄関までと言ったのに、結局クロエは街の中央にある広場まで私たちを送ってくれた。この広場は地図の中央に載っているから、ここからなら宿も探しやすいだろうという彼女の配慮だ。

帰り際、クロエはちょこちょこ私たちを振り向いて光希に手を振っていた。エディも姉と同じく光希に手を振っていたが、その目は訝るような色をして司を見ていた。

探るような視線には、慣れている。司は気にも留めていなかった。さて、今夜のお宿はどこにしようか。

「光希、どこか泊まりたいところ、ある？」

地図を光希の目線まで下げ、尋ねる。しかし光希はこころへの地理に詳しくない。どうしたものかと非常に困った顔をしている。

「泊まりたいところ……ですか？ え、ええと……」

とりあえずはどこか指定しないといけないと思っているのだろう。地図の上を小さな指が行ったり来たりしている。

数分経ち、数十分経ち、司は大きくあくびをした。まだ迷っている光希の指を掴み、適当な宿を指差させる。

「ここ。ここにしよう」

「分かりました」

重責から逃れたことで、光希の表情が和らぐ。

「じゃ、とりあえずまずは宿に行こう。そのあとに、夜寝れるよう

身体動かそう」

「分かりました」

地図をリュックサックにしまい、光希の口にチョコを放り込みながら歩く。

「どうだった。エディさんと遊んで、楽しかったか？」

「はい。楽しかったです」

えへ、と頬を緩ませて光希は司の手を求める。

「色々な本読んでくれました。おもちゃも貸してくれました。パイもおいしかったです。バターとミルクの味がしました」

「タルト・オ・マトンはもとミルクを保存するために作られたお菓子だからな」

「そうなんですか。あれ、手作りだったです。エディさんが作ったばかりですよ。すごいですよね。男の人がおかし作れるんですもん」

「憧れる？」

「はい。もちろん！」

求められたので素直に手を差し出すと、光希は嬉しそうに縋り付いてきた。まだまだ小さくて肉厚の手は、それでも十分な温かみを持っている。

「あ、あとなんですけど。エディさんが、やたらつかささんのこと聞いてきました」

「へえ、例えばどんなこと？」

「ええと……つかささんには双子がいるのか、とか。黒い服は着るのか、とか。メガネはするのか、とか」

「ふうん。それまたおかしなことを聞く人だね。どうしたんだろうね」

ふと、クロエに連れられて彼女の家に上がったときのことを思い出す。

エディは既に部屋にいて、司の顔を見た瞬間、驚いたような表情をしていた。それと今の質問は果たして関係あるのだろうか。考えるが答えは出ず、司はこの謎を放置することにした。

今はとりあえず、メシだメシ。夕食の確保だ。

ゴシックな街並みに圧倒される光希の手を引きながら、オレンジ色に照らされる今にも崩れそうなレンガの家の間を縫うように宿へ向かった。

## 【カリヨンスクール】

「・・・・・・・・眠い」

「眠くても起きてください。もう朝ですよ」

「朝？」

司は布団の中から腕を伸ばし、てきとくに脱ぎ捨て布団の上に乗ったコートのポケットから古びた懐中時計を取り出す。

「・・・・・・・・二時、十五分」

ぼやけた視界で長針と短針を読む。

二時とか、まだ夜中じゃないか。夜明けまでまだ八時間以上もあるじゃないか。

「・・・・・・・・まだ、夜中・・・・・・・・まだ・・・・・・・・」

「司さん、それ、反対ですよ」

ぼいっと時計を投げてもう一度丸まると、呆れたように時計を反対にして読んでいたと指摘された。

十二時間表記しかできないアナログ時計の欠点は、ひっくり返すと正確な時刻が分からなくなることだと思う。しかも針の先にあるべき数字が消えかかっていればなおさら分からなくなる。じゃあ懐中時計を分解して薄れた文字をなぞればいいのだが懐中時計は頑丈に出来ていて、分解させようとすると爪が剥がれそうになるらしいのだ。痛い思いをするくらいなら、見づらいままで我慢する。

「二時、十五分って・・・・・・・・何時？」

「二時十五分は二時十五分ですけど、今は七時四十五分です」

「…………八時にもなっていないじゃん…………。寝る」  
「もう少しで八時ですよ！起きてください！」

布団を手放そうとしない司にしびれを切らしたのか、光希は両手で布団を掴み、引つpegしにかかっていた。

負けじと司も布団の裾を身体の下に敷き込んで応戦する。

見方によつてはほほえましく、見方によつては大人げない戦いが始まった。

「起ーきーてーくーだーさーいー！今日は十時からクロエさんの家に行くんですからー」

「くろえ？…………誰？」

本気で分からなくて聞き返すと、光希は絶句したようだった。

「誰って…………昨日会ったばかりじゃないですか！タルトオマオマ振る舞ってくれたじゃあないですか！忘れたんですか！？」

「光希」

「何ですか？」

「オマオマじゃなくて、オ・マトンだ」

「今はそこじゃないです！ほら、早く思い出してください！」

くろえ。まだ働く気のない脳の中にある引き出しを開けて、その三文字の記憶を探す。

くろえ…………くろえ…………クロエ…………あ、思い出した。

「チャイニーズに騙された、可哀想な人…………」

「その思い出しかたが一番かわいそうです。さあ、思い出したなら

起きてください。したくしますよ」

「ん……気分乗らない。行かない」

素直な今の気持ちを伝えると、「なに子どもみたいなこと言ってるんですか！」と六歳の子どもに怒られた。

もう、なんで光希はこんなにも司を布団の中という暖かい天国から引きずり出そうとするのだろう。何が目的だ。金か。女か。あいにくどちらもち合わせていない。

薄く目を開けて抱えた自分の膝をぼんやりと見つめていると、光希のモーニングコールとともにキュウ……というかわいらしいくぐもった音が聞こえてきた。

腹の虫だ。

司の大きな目がパチリと　でも開いても眠そうなのは変わらない　開く。がばりと腕をマットについて上体を起こすと、真っ赤な顔でいきなり起き出した司に驚く光希と目が合う。

「お前、腹減ってるのか」

問うと、光希は恥ずかしそうにぎゅっと布団を握り締めたまま下を向いて黙り込んでしまった。

光希は嘘がつけないし、自分の、主に衣食住に関する欲を口にすることも何故か出来ない。多分、司を執拗に起こそうとすることで遠回しにお腹が空いたと伝えてきたのだろう。

「……腹が減ったなら、そう言え。何も恥ずかしいことじゃない」

ゆっくり、呟くように言い、「シャワー浴びてくる」と光希の頭に手を置いて立ち上がる。脱衣所で洗いざらしてよれよれになったシャツを脱ぎ捨て、熱いお湯を一気に浴びた。



幾分か目が覚めた。

かぶりを振って髪の水滴を飛ばし、光希がやってくれたのかハンガーに掛かってあったいつもの青い詰め襟を着て、深緑色のアウターを羽織る。準備はもう出来ていたので二人は荷物を抱えて部屋から宿場のエントランス　と呼ぶにはいささかムードに欠けるに降りる。この宿で一番美人であろう受付嬢に一泊分の宿泊料と鍵を渡し、もしかしたら今夜もまたお世話になるかもしれないと伝えた。

同じ女性から朝早くから開いている店を教えてもらい、そこで朝食を摂る。その最中、聞き覚えのある鐘の音が聞こえてきた。

カリヨンだ。

「司さん、なってますね」

「そうだな」

ふと、小さい頃に会ったあの黒尽くめの闇みtainな男は、この鐘の音を聞いたことがあるのか？　と思った。

多分、遠くから響き重なり合い、膨張するような音が、その男の声に似ていたからなんだと思う。

十時少し前の、日がまだ昇りきっていない時間に昨日お邪魔したクロエの家につくと、彼女は淡いクリーム色をしたカーディガンを羽織ってドアの前に立ち、司たちを待っていてくれた。二人の姿を認めたクロエは、ほわっと笑顔になった。

「今日はハウセン神父のところではなく、カリヨンスクールに行くことになってしまったんですけど、大丈夫ですか？」

「自分は構いません」

どこに連れて行かれようが、結果的にファン・ハウセンに会えるのならば過程は気にしない。

「光希は？」

「ぼくも大丈夫です」

「二人ともありがとう。この次は絶対に教会に連れて行って差し上げますからね」

司たちはクロエの横を歩き、今から向かうカリヨンスクールについての説明を受けた。

「今から向かうのは、この町で一番古いスクールなんです。有名なカリヨン奏者もたくさん輩出しています。あ、カリヨン奏者になるには二つ、道があつて、一つはスクールに通つてレッスンを受けること。もう一つは教会で直接神父様からご指導いただくこと。でも大半の人はスクールに通っているんですよ」

「クロエさんはどちらなんです？」

「私？ 私はね、教会で直接神父様から教えてもらつてるよ」

光希とクロエの話を聞きながら、中央に噴水がある広場を丸く囲むように建てられたレンガ造りのアパートの一階部分に入った。どこにでもある民家の一つに入り、個人宅でレッスンをするのかと思つたらきちんと『メツヘレン・カリヨンスクール』と、見えないところに司の懐中時計の文字盤のような薄れた字の看板が目立たないところにかけてあつた。

キィ・・・・・・と木の扉を開けるクロエの後ろを、リュックサックを抱えなおしながら光希の後に入る。中では光希と同じ年と思われる小さい子供が十人ほど、リビングの床に本を広げてぺたんと座り、部屋の前方に座る妙齡の女性の話を熱心に聞いていたが、ド

アの開く音に反応して一斉にこちらを振り向いた。  
そしてパツと表情を明るくした。

「クロエせんせえだ！」

「クロエせんせいこんにちはー」

立ち上がり、子供たちはわらわらとクロエの周りに集まり始める。  
信頼されてるっぽいな。ただ懷かれているだけにも見えるけど。  
楽しそうにひつついていた子のうちの一人がクロエの数歩後ろに  
立つ司に気づき、ピツと指を指してきた。

「せんせえー。あの人、せんせいの彼氏？」

その無邪気な一言で視線と好奇心が一気にこちらに集まってきた。

「わぁーっ！ せんせいのカレシだせんせいのカレシだ！」

「かみの毛で目がかくれてよく見えなーい」

「見たことない服きてるー。なんか長い棒持つてるー」

「あれえ？ 子どもも一緒にいるよ。………！ もしかして、  
せんせえの」

「「「かくしごとー!?」「」「」」

キヤーツ！ と、子供たち 主に女子 のテンションが上がる。  
る。

最近の子はまあ随分とませている。

性格がら、特に否定も肯定もしない司に代わって、少し顔を赤ら  
めたクロエが「違いますよっ」と反論する。

「司さんとはそんな関係じゃありません！」

「「「え」「」「」」

今度はあからさまな落胆の声上がる。  
ぶう、と頬を膨らませていた子のうちの一人が、思い出したように呟いた。

「……そういえば、せんせえの彼氏って、エディさんだったもんねー」

「それも違いますよ。エディは私の弟よ」

「えー、でもエディさんこないだ、せんせえのコトが好きだって言ってたよ」

「姉弟なんだから好きなのは当たり前でしょ。さ、早くレッスンに戻りましょう」

子供たちの背中を押して元の位置に戻したクロエが、パン、と胸の前で手を合わせて司たちを振り返った。

「あの、もしよかったら、光希くんも一緒にいかがですか？」

光希をレッスンに混ぜてみますかと提案してきた。

「いいんですか？」

「もちろん。せっかくきたんですから」

「だって光希。どうする？」

足元にいる光希を見下ろすと、彼は司を既に見上げていて「やりたいです！」とうずうずしながら言ってきた。その背中を下から叩いてやると、ててつと光希は小走りで子供たちの輪の中に入っていた。近くの男の子から床に広げられている本を見せてもらい、なにやら説明も受けている。

子供はすぐに周りになじめるから楽でいいと、食後のあくびをのみ殺しながら考えると、隣にコトンと椅子を置かれた。

「よろしかったらどうぞ」

「あ。ありがとうございます」

「うーん。ここよりこっちの方が見えるかしら……」

部屋全体が見渡せる窓際に置いてもらった椅子に腰掛けると、意外と室内は広かったのだと知った。でも民家なのは本当のようで、右奥の部屋にちらりとキッチンが見えた。

クロエは妙齡の女性の許へ行き、なにやら打ち合わせしてる。その話の内容にもこれから始まるであろうレッスンにもあまり興味はもてなかったが、寝るのは失礼かと思ったので司は窓の外の古い町並みを眺めることにした。

協会本部が置かれている横浜とは大違いの、まだ色んなものが未発達な街。だが行き交う人は不便さを感じていないようだった。

完全に目が覚めたメッヘレンの大通りでは、多くの人が闊歩していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7904n/>

---

死神の薔薇

2011年6月21日19時54分発行